

まぬから、もう一度だけここの楽しみを味ひたいものだ……と、思ひながら、揚屋八文字屋の裏まで来た。

その裏塀の壁の崩れた穴から、ふと、中を窺いて見ると、ちようど目の前の一と間に、名も知らない女郎が一人、當節はなかなか女郎の手などにも入らぬ本ものの小判五兩包みのもの四つを積みならべて、さもさも嬉しさうに眺め、何度かぞへたところで同じの、分り切つた勘定を、何度も何度も繰り返へしてゐるのであつた。

男はこれを眺めて考へるのであつた。今時分だと、京都の客では女郎に金をくれるやうな時期ではないのだ、九月二十九日過ぎになつて、こんなに至急便などで送つて来た客は、さてはどこかの田舎の初心いお大盡だらう。だが、何が何と云つても、この色里ではあの山吹色の顔を見せてやらぬことには、埒の明かぬところだから、なぞと思つてゐるところへ、揚屋の女將が拵り文ひなぶに小判五兩ほど持ち添えて遣入つて来たのだ。

「おやおや、御覽なさいよ、わたしの所へも半七さんから御手紙が来ましたよ、返事をあげる

時、序手にこちらからもよろしくと御禮を書き添えておくれ、……太夫が、何もかも遺手よてにまかせて金のことなどかまはぬと云つたのは昔のこと、全く今どきの二十兩は昔の二千兩にあたりますよ、……殊に、北國のお方は、人からの文をみせびらかして嬉しがる風があつてね、それも人丸ひとまるや貫之つらゆきの筆蹟などよりも、お前さま達の書捨て文のはうを大事にし、紙の損ずるのを心配して裏うちまでし、巻物にしておくとか聞いてゐますよ、それに引きかへ、地ちの衆と来たら、文が届けられても読みもしないで、小宿に抛り捨てに捨てて、しまひには挽臼の敷紙になつて了ふのが落ちですつて、……太夫さまのお名が小麥の粉にまぢつて汚れてしまふなんて藝もないことぢやありませんか、それにまた今頃の京の大盡となると、ただもう氣位ばかり高く、こちらの思ふやうにはなりませんよ、結局のところは、太夫さまだつて勤めの身ですもの、下手に、殿振りのよいかたなどと色好みなさることはまづやめなつて、たとへ云ふことも野暮たく、粹すまもへちまも判らぬ初心うぶな方であらうと、こんなお便りを下さる半七さまのやうな客がほんとの大盡でござります、……いつたにかう云つて、通人なんてものは、女郎さまが

たには役に立たぬ代しろもので、随分洒落れた風の男前自慢な人も、京大阪堺には澤山しやありました
が、思慮もない遊びばかりして、いつか揚屋の手前も氣拙きせついことになり、近寄りもせずに廻り
道をして行くやうになつてしまひました、云ふならばこんな人達は皆大莫迦だもがなんですよ……も
し、女郎狂ひだけで満足してゐたならば、まだまだ末長く楽しみも出来たらうものを、その上野
郎狂ひにまでと氣を多くしたりして、惜しい身代を見す見す失くして了ひ、働きもまだこれか
らと云ふ若盛りの身體をしてゐながら、情ないあてがひ扶持の暮し、それでのめのめと生きて
ゐるなんて、何が面白いことがあるんでせうかね……」

と、あたかも扉裏から窺うかがいてゐる男を見つけて、それにあてこすりを云つてゐるやうな女將
の話であつた。だが、これも天命なのだ、女將の言葉は一々道理至極しごくなので、彼の男は思はず
身ぶるひをして、その壁の穴から身を退くのであつた。

それから、橋本の渡し場を越え、松の尾へと出た。途中で不用の廻り道をせず、まつ直ぐ愛
宕いと詣りをしたら、こんな情ない思ひもせずすんだであらうもの、それを色里をかいまのぞく

だけでも眺めたいと餘計な遠まはりしたばかりに、いいみせしめをうけたものと、今更に身
に泌しみみて後悔するのであつた。

男は、今は都も何となく面白くも思はれなくなり、それから嵯峨に行きつくと、すでに早や
夕暮であつた。

旅人の袖ひきとめる女にひかれて、筆屋といふ宿に一夜の泊りをきめた。廣座敷であつた。
季節の焼松茸を肴さかなに、酒をいろいろともてなしてくれる、その女の立居姿は何となくつまし
く、人の機嫌とりなぞの様子もどこか京都の町の者らしいところが窺うかがはれるのであつた。年こ
そ大部分とつてゐるが、その女の廊下を歩いて行く素振りすぶりは、どうもただの女のやうにも思は
れなかつた。

何がなしに、つひ口説きよつて、その昔話を語つてみると、云はぬことか、その女は島原の
太鼓女郎たづなで土佐とさと云ふものの成り果てた姿であつた。でもやはり、昔の色香は残つてゐるて艶し
く、男はうかうかと物詣りの精進心も忘れて、木棉もめんの夜具も寂しいながら、あさましくも太夫

にでも會つたやうな夢を結び、更にはその下向の時も戯れることを忘れなかつたのだ。

その女のために御初穂の賽錢の残りまで、すつかりはたいて了ひ、自分は山崎からの舟賃もなくして、草鞋ばきのお拾ひで通し、たうたう中食もとらずに歸つてきた。それでもなほ、男は人を見る度暫くは、随分身に懲りてゐるつもりであるが、こんなになつてもこの色戀の道は諦められぬものです、と語つてゐたと云ふことであつた。

二、人には棒振同然に思はれ

上野の櫻が返り咲いたと云ふ。

でなくとも、物見高いのは都の人の常だ、季節は次第に物寂れた秋の暮れであつたが、それをまるで春の立ち返つたやうな気分になつて、花見にでかけ、袖をはらふ寒風も氣にとめぬ様子、寄ると觸るとこの季違ひの櫻の噂、大變な人出で物静かであつた江戸も湧き立つてゐた。

そのころ、上野黒門町より池の端へでる筋に、しんちう屋市右衛門といふ有名な金魚銀魚を賣る店があつた。

庭前に生舟いけぶね七八十ばいあまり並べ、溜め水を清く、青い浮藻の下をくぐる紅色の金魚、三つ尾をひるがへす姿も美しい眺めであつた、そのなかには一尺ほどの大きな、鱗の光も素晴らしいのがるが、それを金子五兩七兩と出して買ひ求めて行く、さうまたよく賣れるのもさすが江戸、遠國には見られないことであつた、恐らく、それは大名がたの若君の御慰みに買ひとられるのであらう。

その店先に、さきほどから三人の男がゐて、生舟いけぶねを眺めてゐた。

こんな豪勢なことも、見なくては判らぬこと、江戸の人の氣持は武藏野ほどに廣いから、金魚一匹に七兩も出せると云ふものだらう、なぞと話してゐるところへ、一人の男、いかにも田舎者臭いみすばらしい姿をしたのが這入つて來た。見ると、小さい玩具みたいな掬ひ網に小桶を持ち添えてゐる、何かと思ふとぼうふらが入つてゐる、金魚の餌になるのだが、それを一日の

仕事にして、わづか二十文の稼ぎ賃を貰つてかへつて行くのであつた。――

「また明日持つて参りますから、何分よろしく……」

と、その男は、店の下働きの者にまで、敬白を云つて行くのであつた。

それを見た三人の者が、あああんな風にして世過ぎをしてゐるものもあるのか、と氣の毒に思ひ、ふと、その顔をうかがつて見ると、これはまた日本橋伊勢町の月夜の利左衛門と云はれた大盡の變つた姿であつた。

この大盡がその家を立退いてから、誰一人その行方を知らず、どこの國で暮してゐるだらうと思つてゐたのに、あはれにも惨めな彼の姿であつたのだ。

思はずその連中は彼を呼び止め、――

「――あれからこつち、昔馴染の友達どもは皆一樣に、どうしてゐるだらうとあなたのことを案じてゐましたが、知らなかつたとは云へ、随分長い間御苦勞なさつてゐる御様子ではありませんが、友達甲斐もないと悪く思はないで下さい、かうしてお目にかかれたからには、これか

らは、私たちが引きうけませう、どうせ碌なもてなしは出来ませんが、氣樂にお暮し願ひませうよ」

と、云つたところが、相手は、

「お志は忝けないけれども、こんな因果なことになつても、昔の贅澤な氣風は變えられないのだよ、女郎狂ひの果ては、きつとかうなるのが浮世の習ひと思へば、いま更さう恥しいとも思はぬし、御好意はまことに有りがたく思ふが、あなたがたの御援助だけは、どうもお受けいたしかねます、……自分の口から、こんなことを云へば、をこがましくも聞えませうが、一時は世間に多少は名を賣つた利左なのだ、いまかうも落ちぶれたからと云つて、人の袖にすがりたくはない、たとへ悪所通ひの友の誼みからだと云つても、人さまのお合力にすがつてその目を暮してゐると云はれるのは口惜しいこと、あなたがたのお志はもうもう有りがたく、ありがたいでございますが、そればかりは御辭退いたませう、……だが、随分久しぶりにお逢ひしたこと、またいつお目にかかれるかも判りませんから、そこで一杯茶椀酒でも楽しませう

か

そのまま、自分が先に立つて、茶店に入り腰を下すのであつた。

「——おい嫂さん、これ切りしかないが、この分だけ飲ましてくれ」

と、あの二十五文をそこへ投げ出した。だが、しかし彼の家では夕餉のできるのを楽しみに、妻子がいそいそとして鍋も洗つて、彼が米を買つてくるのを待ちうけてゐるのだらう、それを彼の男は知らぬのではないのに、氣強く構えて、こんなことまでするのだ、——と、さう彼の氣持を察して、三人の者は涙ぐまれるのであつた。

「——空模様もあてにならない、時雨れて來そうな氣配だから、まあこの邊で切りあげ、一つあなたの侘住居へ御案内して下さいませんか、そこで色々昔語りしながら、酒をいただいたら、一しほの慰めともなりません、さうそ、唯今のお内儀は定めしあの吉州太夫でございませう、おむつまじくて……」

と云ふと、

「いえ、その通り……その吉州のためにこそ、私はかうまで落ち果てたのです、傾城に誠なしと世間では云ひますけれど、そのないと云はれる誠もあればかうして現はれるもので、今から四年前、私たちの間に男の子までもうけ、その子に父さま母さまと云はれるのを貧乏暮しの唯一つの楽しみに生き永へて、今日までもこんなにしてゐる次第で……」

と、夢のやうに語るのを、三人の者は現うつのやうに聞いてゐた。

折から谷中の諸寺がつき出す入相の鐘。それを耳にして立ち上ると、吳竹のさはぐ雀の小宿みたいないぶせたい所を通り、小石川餌差町の東端れに行きついた。

その裏店のみすぼらしげなところが、彼の侘住居であつた。

「——さて、三人一しよに入られては、とてもとても腰の懸け所もござらんのだが、まあいいですよ、何をかくし立てすることもありますまい」

と、利左衛門は案内して行くと、路次の蘆垣に、もう秋も過ぎた朝顔、末葉も枯々になつて了つたのの蔓をさがしながら、一人の七十餘りの老婆が、その實を一つ一つ拾ひ集めてゐた。ま

た來年の眺めを楽しもうつもりであらうが、しかし、人の命は明日を知らぬと云はれる、思はずその老婆の顔をのぞくやうにして、――

「婆さん、ここを通らせてもらひやすよ」

と、世間並の挨拶をして通り抜けた。古井戸の埋めたところを危かしさうに渡り、陰乾し煙草をかけてあちこちに引つばつてある細繩の下を潜りぬけて行くと、ちようど、その窓口から父親の姿を見つけたのであらう、――

「ああ、父さまがお錢を持つてかへらしたよ」と、子供が呼ぶ、不愜をさそう聲であつた。

彼の内儀は、さすがは昔女郎をしてゐただけあつて、眼敏く、一しよに來た男たちの顔を見分け、突然のやうに、――

「恐れいりますが、お三人さまのうちで、伊豆屋吉兵衛さまだけはお遣入下さいますな、どうぞお二人さまだけでこちらへ……」

主人も、また三人の者も吃驚し、不思議に思つて、――

「また妙なこと云はれるものだ、どうして伊豆屋だけを咎めるのだな」と、いふと、

「じつは、昔の稼業のとき、是非もない勤めからではありませんでしたが、伊豆屋さまとは唯一度、假りの枕をかはしたことがございまして、今でもそのことが氣にかかつておりまする、こんなことはいま更主人には聞かせ申したくないことなのですけど、かくして仕方のないこと、さよう頼みます……」

と、内儀ははらはらと涙をこぼすのであつた。聞けば無理もないことながら、その女の氣持がいとほしく、却つて女房の眞心を見せられ、亭主も満足であつた。――

「女郎のときは、そんなことはやむを得ないことぢやないか、それをそんなに硬苦しく思はんでもない、その氣持だけで澤山だ」

と、亭主もかりりとして、――「今日は私のお客さまだから、さう差別をつけなくてもよろしい」

と、三人をうちへ招き入れはしたけれども、家には茶を焚く薪一本とでもないありさまであつた。その時、内儀はふと、吊し佛壇の扉のはづれてゐるのに眼をつけ、すぐそれをはがして、茶切庖丁で細かく割りさき、間に合せの薪木としたのである——賢い女であつた。

「さう云へば、さつきのあなたがたの秘藏つ子は？」

と、一人が云ひだした。見れば、部屋の片隅に、十四五色もあらうか、いろいろのこま布ぢりばをつぎ集めて作つた蒲團にくるまつて、子供は丸裸のまま寒さうにしてゐる様子、見るも可哀いさうであつた。

「これぢや、寒いでせうに——」

と、思はず云ひかけると、内儀はすぐ戯談にまぎらせて、——

「いいえ、いつもあなんでございますの、着物を着るのを厭やがつて、こんなことをして、私を困らせるんですもの……」

だが、母の心も知らぬ頑是ない子供は、

「嘘だえ、さつきあの大きな泥溝にはまつたんだ、それで裸にされて寒いんだよ、着物べべが乾いたら早く着たいよ」

と泣き出すのであつた。

亭主も女房も随分と氣強いほうであつたが、さすがこのときは前後も判らなくなつて、泣き出した。客の者も誰一人、しばらくは物を云ふものもなく、なるほど、あの子供に着替へさせるもの一枚もなかつたのだ、親の身としては好んでそんなことをしてゐるのではない、ほんとうに悲しからう、それもよくよく生活に窮してゐればこそ、こんな辛い思ひもしなくてはならぬのだと、眼の裏が熱くなる思ひであつた。

歸りぎはになつて、三人の者がそつと囁き合ひ、ちようど持合せてゐた小遣錢を取り集めて一步と三十八、それに小錢七十文ばかりを、そつと天目茶碗に入れおいて立ち上つた。

亭主も名残り惜しげに、わざわざに見送つてくれた、それではまたと挨拶を交して、三人は夕暮時の道をいそいでゐると、暫くしてその後から、亭主があ金の金を持つて追ひかけて來たの

だ。

「何と云ふことをして下さるのだ、私は人さまから筋の通らぬ金などは、一文たつて貰ふ氣持はないのだ」

と、どんなに云つても肯かず、つひには、その金を地面に投げ捨てて戻つて行つた。

仕方がないので、三人の者も諦めてその日はそのまま家へかへつたが、二三日して、また相談し合ひ色々の品を買ひ整えて、内儀さん宛に送り持たせてやつた。ところが、すでにその時は、彼等はどこかの在郷へ立退いて了ひ、その家は空家となつてゐた。

いろいろ手を盡して探しては見たが、その行方はつひに判らず、三人の者は今更に悲しみを深く感じた、これも思へば、つまりは女郎狂ひのため、彼の大盡の零落がこよないみせしめの種ではなからうかと、云ひ合せたやうに感ずるところがあつて、もろともに女郎狂ひから足を洗つたのであつた。かうして、妙なことが支障となつて、その頃彼等の馴染となつてゐた薄雲、若山、一學といふ三人の女郎は大部みいりがなくなり、損をしたと云ふ噂であつた。

三、紋所は昔を残す

河内の國、高安郡の在所、ある山の麓近く一人の資産家があつた。親の代から木棉あまなの商あまなひをしてゐたその金が貯り貯つて、この男の代になつたときは、すでに一番牛の寝たほどもある大身上となつてゐた。それなどの資産なものだから、どんなに荒い遣ひ方をしたところで、とても一代では耗へることもあるまいと思はれた。

その上、その當主と云ふのが、中々な確り者で、色里なぞへは足を踏み入れたことはなく、せいぜいが堅氣者の妾狂ひをするのが關の山であつた。それも、三十日のあてがひ扶持が一斗五升、家賃が六疊敷一間で二匁、それくらゐの程度までと極めた妾狂ひで、しかもそれで満足してゐたのだ。

ところが、或る時、京都の女で、西國の大名屋敷へ奉公に上つてゐたのが、その勤めもを了

へて親許へかへつて來たのがあつた。その時の周旋屋と云ふのが大阪に來て、藏屋敷から女を請取つたといふ話を、この木棉屋がふと耳にはさんだので、さつそく話をすすめてみた。

それがうまくまとまつて、年銀五枚と云ふ約束で、大阪白髮町の觀音堂のそばに、ちよつとした貸間をみつけ、かなりの婆さんを一人おき、不斷は路次に向いた戸を堅く閉ぢて圍つておいた。それでも安神が行かない氣がして、彼は、ちよつと表向ひに住つてゐる貧しい塗師の職人へ、時々心附けをして、この妾の張番をたのみ、よそからの男の出入を嚴重に監視させてゐた。それどころか女の父親などが遙々京都から季節の見舞にやつて來たりしても、飯を喰はせるのは仕方ないとして、そこへ寝泊りすることを赦さず、夜は別宿をとらせると云ふありさまであつた。それぐらゐの男だから、女が徒然の慰みに飼つた三氣猫が、運悪く男猫であつたのを見つけて、これをよそにくれて了つたと云ふことも不思議ではなかつたのだ。

こんな悋氣深い、山家大盡ではあつたが、それでも兎に角、その村の庄屋を勤めてゐる身分柄を考へ、少しは村の百姓共の思惑にも氣兼ねして、一應はちやんと公務を日の中に務め、夕

方になつてから四里もあるところから早駕籠で通つて來てゐた。その道筋は、ちよつと新町なにかを東門から西門をへ抜けることになつてゐた、だが、そこを毎夜のやうに通つてゐながら、遊里の事には盲同様のこの男は、花やかな揚屋の提灯も眼に入らないらしく、唯さうして三年の年月、一夜もかかさず、せつせと妾のところへ通ひつづけたのであつた。

この仔細をよく知つてゐる路次口の例の塗師職人が、近所の尺八指南所長崎勘十郎の家、云はば町内の遊び人の溜り場に行つてゐた時、世間話の末になつて、この大盡の話をした。——遠い夜道を、ああして通つて來る隙があるなら、女郎狂ひでもしたらよさそうなものだが、可笑しなことだ、それも毎夜新町を通つて來るのだから、あの男は盲か痴者こけかと思ふ、もうすでにあんな妾に大部の金を注ぎこんでゐる、と云つた話に、そこにゐた大勢の若い者も呆れて大笑ひしながら、

「——だが、その金持の百姓めを、何とかして本當の色町へはまりこませて見たいものだ、俺等は先立つその大事なものがないばかりに、茶屋でも風呂屋でも面白い目は見させてもらへな

い、思ふやうにならぬが浮世とは云ひながら、この秋なんぞもまた棉の豊年なさうだ、その庄屋の懐に舞ひこむ金は莫大だらうが、ああそれが欲しいもんぢやよ、と云つてその金を身につけるんぢやない、もうもうさつそくだが、木村屋の小太夫を、梅女郎つきで三十日がとか揚げ詰めに買つてやるのだがな」

と云ふと、その好みは悪くないな、とちようどその座に居合せた男、八木屋の霧山太夫に通つてゐる木半と呼ばれた大盡が話の仲間入りをして來た。

「その話の様子では、きつとその男は女郎買ひの豊かな楽しみを知らないのだよ、むかしのことだが、長門の國萩に鹽道と云はれた法師があつたさうだ、それが歌仙といふ太夫を落籍して自分の宿の花と詠め、若衆のはうでは松島半彌が色盛りの時分にそれと大した遊びをしたものなさうだ。

と云へば、また白子町の播磨と云ふ御仁は、太夫の瀬山を自分のものにして、それを一生の手生けの花とした榮華、また尼ヶ崎町の鹽と云ふ大盡は、銀で川の淵も埋まるほど、ありつた

けの遊びを盡した揚句は、佛もない天満の堂島に世捨人の暮し、自分も淋しかつたらうが、鼓譚なぞの師匠をし、暮會なんか顔を出すのを唯一の楽しみに蚊細いその日暮しをする身となつた、この大盡の馴染であつた太夫の金吾も、それまで連れ添ふてゐたが、その男をいとしく思ふ餘りたうとう出家して了つた、さうした男の辛苦を見てゐるのが辛らかつたのだらう、昔の豪華な太夫の時代を思へば、それを引返へての苦勞つづき、そこを思ひつめての出家とはいかにも殊勝なさばきであつた、いつたい女郎と云ふものはかう云ふものなのだ、表うらべは義理がたく、内心は實うちこころに情が深く、馴染めば世の中に女郎ほど面白いものはないのだが、それを今の話に聞けば、その庄屋さまとかは、惜しいあたら錢を使ひながら、少しも女遊びを知らない、まるで磯の淺瀬でちやぶちやぶしてゐるやうなもの、何とかしてその庄屋に勧めて、沖のはうへ泳がせて見たいものだ」

と、いかにも残念さうに、尤らしく云ふのであつたが、物には時節といふものがあるもので、はたで節介しなくとも熱れ落ちる時が來ればひとりでその通りになるのだ。

その年の七月の末であつた。

揚屋揚屋では座敷踊が始つたので、町方の女房までもこつそりそれを見物に出かけて行く。庄屋の妾もこの踊を見たいと頼んで見たのであつたが、なかなかその赦しがでなかつた。それを押して、しきりにせがみ、――

「――今日で踊りもしまひになりますよ、扇屋の大寄があるんなさうですから、今日だけは是非とも一遍だけ参りませうよ」

と、餘りうるさがつたものだから、氣はすすまなかつた庄屋も、たうとう踊見物に引き出されることになつた。

新町の西口にゐた香具屋の新九郎と云ふ、今賣出しの幫間に案内を頼んで、塗師のお内儀も連れて出かけた。その頃は實に太夫も揃つてゐた、揚屋の筆頭と云へば、先づ佐渡屋、そこには、たかま、奥州、揚卷、萬城、吾妻、紫など、吉田もまだ振袖新造でしかなかつた。新屋の金太夫もこの頃はまだ小女房であつたが、それでもさすがこの頃からすでにどこか太夫めいた

品格があつた。丹波屋の小薩摩はすらりと姿のよい女、井筒はただ美しかつた、小琴のちよつとにがみ走つた容貌も一風變つた魅力であつたし、明石屋の唐土もろこし、吉野、それから住吉屋の瀬川、この女は少し鼻が高く難をつけられつたが醜いことはなかつた。堺屋の君川はおつとりしてゐたが、普通の女郎のがさつな賢さよりは増しであつたし、又七の初瀬と云ふ女は、大和のさる大盡の思はれものであつた。

が、何はさせ、かうして廊中二十四人の太夫が十九人まで、扇屋の一とところに集つたのだから、その絢爛さは想像にも餘つた。更にこの太夫のほかに、天神女郎、十五女郎かこひと綺麗どころが總勢で百三十二人づらりと並んで、いづれも皆紫の帽子をかぶり、手拍子揃へて、腰ぶりも艶しく、蹴返し、刎袂、引足とその華麗な踊りの美しさ、――中の腰掛には、役者、幫間、浮かれ大盡とこれもまたずらりと並んでゐる、こんな面白い場面は、唐天笠にもあるまいと思はれる情景であつた。

庄屋の一行も、日の暮れるのを惜しみつつ、この情景に見惚れてゐた、ちやうど、その時、

伏見屋の端局はしつぼねで勝之丞と云ふ一匁取の女郎が、踊装束のままて人だかりの後うしろからやつて來た。雑沓を押し分け押し分け扇屋の前まできて、彼の庄屋の左手を何氣なく握りしめ、

「すみませんけど、どうぞそこを明けて、お通し願ひます」と、ぴつたりその身體をすり寄せたのだ。

その途端に、もう庄屋は呆つとして了つて、いきなりあたりの人たちを力まかせに突き退けこの女を踊りのなかに入れてやつた、——これがこの男の戀のはじめとなつて、その女の市松模様の浴衣を見覚えてゐて、彼の前に踊りまはつて來る度にもう夢中になつて、その女の踊ぶりを褒めるのであつた。

そこから、すぐ妾だけを先にかへし、幫間の新九郎に頼んで、急にその女に染馴みだした、これが彼の女郎買ひのはじまりであつたのだ。それから、もうこんな面白いことを今まで知らなかつたのは残念であつたとばかりに、さつそく妾には暇をくれて、一ヶ月定めで借りたあの貸家も何の未練氣もなく釜の下の塵も灰もなくするばかりに綺麗に片付け、自分は毎日毎

夜、亂痴氣騒ぎ、いつの間にか端局の女郎から一足飛びに太夫の越前と馴染むやうになつたのであつた。

霧山と深い仲の木半大盡と一座して遊ぶこともあつた。互ひにこれでこそ浮世の楽しみが判るのだ、と語り合ひ、共に二年あまり散々な遊びに溺れてゐた、しかし、そこにまたお定りの運命が待つてゐたのだ。いつかあれほどの財産もすつかり吐き出してしひ、昔の面影も全く變り果てた、その上、二人の零落のため霧山は身うけもされずじまひになつてどこかその行方も知れずになり、庄屋の馴染んだ越前は病死するといふ變り方であつた。

そののち木半といふ大盡は、ますます零落して、渡世もいろいろとかへた。最後には、茶碗の産地である高原といふ所に住つて、そこで猿廻しの藝人と一しよに暮してゐた。そして毎日わたざねの油屋へ通ひの身となつて、金かね碓からすを踏む労働をしながら、手足のけだるくなるのもよそに、その昔扇屋の長門と口説きごとしたなどと、人にも聞えよがしの高咄をしてゐた。

一方、河内の庄屋大盡は、父祖傳來の田畑山野はむろん、野山の竹や木まですつかり賣りつ

くしたので、もう生れ里にも住めなくなり、一家はちりぢりに離散して了つた。それでも、さすがは昔の庄屋であつた、その在郷の道筋を離れがたく思ふのであつたらうか、大阪玉造の場末、中道と云ふ橋のたもとに小さな餅屋をひらいたのであつた。

その店先にかけた暖簾の紋は、笑止なことに、梅鉢のしるし、その昔越前の定紋であつたと云ふことである。

巻の三

一、思はせ姿の土人形

明け暮となく、野郎狂ひに熱中して、人の意見などには鼻もひっかけずに、四條河原に通ひつめてゐる男があつた。この大盡が引き連れる血氣旺んな末社連、役者連中のすさまじい足踏のおかげで、その道筋の橋がいたんでいたんで仕ようもないと云はれたほどの旺んな遊びぶりであつた。

都のこの大盡はむろん大金持であつたが、その上非常な美男であつたのだ。その昔、美男と

云へば、まづ業平の中將、下つて近代では名古屋三左衛門、そして當代ではこの四六大盡と並べられたものである。誰一人として、その評判を知らぬものはなく、毎日毎日の彼の道中筋はえらい人氣であつた。

石垣町の遊女どもなどは、彼のお通りと聞けばもう飯も喰ひかけにして、おもてに走り出て見る仕末、また彼の美貌を眼に見たりした水茶屋の娘共は、ぼつとして了つて、天目茶碗を手から落しても氣がつかぬと云ふありさま、——全く、大變な女共の人氣で、商賣も何もあつたものではなかつた。

「何が何だと云ふこの女共の騒ぎようなんだらうよ、東山の櫻でも毎日見に行く氣持にはならぬものだに、……たとへば、あの男が生きた如來さまだつたに似たところで、毎日さう見惚れてゐて、ようも見飽きないものだし、見る眼もつづくものだ、追付けそのため眼病の地藏へ七日参りでもするやうになるが落ちだらう、見たつて錢一文の得にもならぬ大盡ぢやないか、あんな男よりは芝居見物の出家衆の機嫌でもとつた方がました、札一枚讀みこんだつて三文の徳

になると云ふもの、むづかしいことではない、ちよつと笑窪を見せさへすれば、それですむことなんだに」

と、女達の母親やまたその抱え主などが叱るのも無理のないことであつた。かうした女達は皆、賑しい所に住み、眼も心も肥え摺れて、色氣を見せる手なども心得てゐるはずであつたのに、その女たちさへかう云ふ仕末であつたのだ、まして堅氣な町家の女房なんか、この大盡見たら、一幅帯をしめたその腰を抜かしかねまいものであつたらう、——これもたまたま美納男に生れつゝの果報と云ふものであつた。

おまけに、彼の年老いた母親は後家さん、それも金持でお寺詣が好きと來てゐたから、全くこの大盡は氣髓氣儘に誰をはばかりることを知らぬ結構この上もない環境であつたのだ。使ふ金を人に借りることは要らず、ただある金にまかせて、この四條河原に湯水のやうな奢りをきはめてゐた。芝居小屋などの、かう云ふ社會は得てして贅澤に馴れてゐるせるか、少し位の散財では顔がきくことはないのだ、しかし、この大盡になると、芝居の太夫元の木戸の者はむろ

ん、雨蛙の宿みたいなちつぽけな小屋の見世物猿でさへ、彼を見ればその顔を見知つてゐて、ちやんと烏帽子を脱いでお辭儀するのであつた。これほどまでに、顔を賣つてゐるその蔭では、彼は少くとも一年千兩の散財はつづけられてゐたに違ひなかつた。ただ一日位のことならば、その一日によしんば百兩一度に撒き散らしたところで、この社會ではそれを驚く者もなく、まるでお伊勢さまに十二燈をあげたほどの効果もなく、特別嬉しがられることはなかつたのだ。

ただ妙なことには、この大盡は徹底した女嫌ひで、まだ一度も、島原の景色は遠目にすら眺めたことはないと言ふ變物であつた。——しかし、これも結局は、物には時節があるの譬に洩れないことになつたのだ。

野郎狂ひの意見がなかなか厳しくなり、大盡もそれに折れて、たうとう致し方もなく、野郎狂ひを思ひ切つたと誓紙を書かせられた、その諸神への手前もあつて、その後は暫く彼は芝居を覗くことさへしなかつたものだ。

やつぱり、年齢が藥なのだ、分別がついたのだと周囲の者も秘かに悦んでゐたが、實はそれも束の間のぬか喜びで、今度は河岸が變つて彼の女郎狂ひがはじまつたのであつた。

この頃の全盛大夫の唐土からこしが、その相かたであつた。通ひはじめると、もう明け暮もないありさま、驚いて周囲の者が彼の身のためと意見をすれば、——

「儂は誓紙はかためたが、色里通ひはしないと云つたおぼえなんぞはないよ」と、悪賢いことにはさうした屁理屈をならべる態度であつた。それでももう誰も二度と意見する者もなくなり、彼の思ふ存分な女郎買ひがつづけられた。しかし、いつかそれもこの町だけの女にも飽きて、面白くも思はなくなつた。折しも江戸に小紫と云ふ大夫のある噂が、彼の耳に入つたのである。

この小紫の評判を慕つて、彼ははるばる京都から江戸へ來たのであつたが、江戸にも豪氣な男がゐる、この小紫を三木とか云ふ大盡が根引きして了つたとかで、もうその行方さへ判らなかつた。

(——残念だ、もう少し早くその女を見に来ればよかつた、しかし、このままのめめ引返すのも業腹だ、せめて、その小紫の面影に似た妓なりとゐないものか、——)
と、しきりに吉原の妓を見てまはつたが、これぞと思ふやうなものにも打突からなかつた。見ぬ戀をするなどは昔の野暮のすること、今の世にはありはしないことであつたが、そのくせ、人の女になつて了つたと聞くとなほ更妙に魅きつけられる氣持であつた。影ながらせめてその姿を見て、それだけなりと京都への土産話にしたいものだ、なほ熱心に人頼みしてまで探して見たが、更にその消息は判らなかつた。

或る日のこと、彼は淺草の寺町の横丁を歩いて行くと、家のなかが見え透くやうな葦簾をかけた一軒のあばら家で、その店先に「小紫姿屋」と云ふ看板を出して、土人形の細工をしてゐる男に遭遇した。

はて、とよく注意して見ると、その男は京都で立役をつとめてゐたことのある嵐三郎四郎の變つた姿であつた。白無垢の上に破れ紙子を着たそのみじめな姿は、舞臺の藝よりは實感があ

つてよかつた。

何か可笑しなわけでもあるのだと思つて、その家に立ちより、

「——これ御亭主どの、この人形が小紫だと云ふなら、どうも妙な造り様だぞ、まづ遊女にしては帯が狭いし、ことに、後姿の具合などはずぶの素人女みたいぢやないか……」と、聲をかけた。すると、

「買ふ氣があるなら持つて行きなされ、値段は一文で一つ、こんな安物にそんな無理な御注文は可笑しなことですぜ、さう云ふ注文は七十四双出して本物の小紫を買ひなさる時に云ひなされよ」

と、笑ふのであつた。その様子が、何か氣になるところがあつたので、彼は卒直に、

「いや、それなんだ、自分もこの女郎をその値段で、年期仕舞になるまで買ひ詰めようと思つて、はるばる京から下つた男なのだが……」

「ふむ、なるほどね、さてはよい女郎の評判は遠い都までも知れるものと見えますな、じつは

この私もこの女郎に思ひをかけて、この三年あまりの間戀ひ焦れながらも、どうせ勤めの女だ、下手な戀文など書くのも莫迦だと思つて、とに角金を貯めて一度だけでも小紫を買ひ、日頃の望みを晴らさうものと心がけ、かうした苦しい中から日に三文づつ掛錢して二年餘り、やうよう七十四匁になつたので、もう飛び立つ思ひ、一日二日で色々手配頼りを求めて借着も整へ、揚屋までもどこそこ極めて、これでよいざと云ふ時になりましたら、何と云ふことですか……眼の先で、つひ小紫が請け出されて了つたのでしたよ、その口惜しいことと云つたら、もう……」

と、男泣きに眼を潤ますのであつた。なるほど、戀と云ふものはかう云ふものだ、と大盡もその男の心根に哀れを感じた。

「だが、さてその小紫の行方はどうなりましたか」と聞いて見ると、――

「それなら、京のあなたに、今の小紫の様子を御覽にいれませうか」

と、立ち上つて、彼を導くのであつた。

唐物町の横町であつた、そこに店構へもまるで目立たぬ一軒の家があつたが、そこを人形屋が指さすのだ、見れば、昔の色香もかすかに残る女がゐた。――

「あれが、三浦屋の小紫ですか、いまは名も變つてお梅と云ふんですつて、……もう人の女房になつたものには思つたつて仕方ありませんよ、さあ思ひ切れなさい、ほかにいくらだつて戀の相手はありませんよ」

と、彼は慰め顔に人形屋へ云ふのであつた。

それからは、大盡はこの男を連れにして、見事な吉原通ひをはじめたのだ。その頃、全盛の高尾、薄雲を敵娼にし、江戸の大盡、髭の長兵衛の座敷も我が物顔の豪遊、――たうとう京都より持参した三千兩を一角残さず綺麗に使ひ果したのであつた。

その後、かの人形屋と同居し、まあせめて女郎が踏んだ土を使つて生活の種にもしようと、揚屋町の砂に金龍山の土をまぜて薄雲、高尾の太夫姿人形を造つて賣り出した。だが、それも

思ふやうな商ひがなく、大ていのは釜の火を焚けぬことが多かつた。とは云へ、喰はずにも
 ゐられないので、二人揃つて連れ節の變り加賀節などを唄ひ歩いて、役もなく金もないその日
 暮しをしてゐた。さうなつてからは、もう世間も人もこはくない二人は、誰にはばかることも
 ない水入らずで、昔の女郎狂ひの意地張り咄に憂さ晴ししてゐるのが、そのおしまひであつ
 た。

三十になるやならずの若さで、こんな一代の榮花をしてつたが、まだまだ老ひ先の長い彼
 は、またどうにかなる時節もあつたかも知れない。しかし、四六大盡の京都のあの大身上は、
 もう母親にさへ見限られて、すっかり跡も形もなく、人手に渡つてつたのであつた。

二、子が親の勘當

このころ變つたことを聞きました。ちつと自分のうちにくすぶつてゐたんでは、珍しいこと

も聞かれないでせうが、かうした色里におりますと、面白い咄もいろいろ耳にはいります。

揚屋町の入口に、桔梗屋といふお茶屋がございますな、あそこの女房は昔は(分別のお萬)
 とまで云はれた利巧な女でして、太夫の八橋や夕霧についてゐた香手の開山(かま)みたいものでした
 が、いまではああして、すっかりおさまつた様子になり、妓たちからお嬢さまと云はれる安樂
 な身分になつてゐます、しかしございますよ、いまだきになりましたは、あそこの店先きに腰
 かけ、通る妓を眺めてゐましても、むろん厭らしいと思ふやうなものは一人もありはしません
 けれど、と云つてこれぞと夢中になつて馴染めさうな妓も見あたらぬものですよ。

なるほど、いまの女郎衆は心はひらけてゐますが、どうも品がなくなつたやうに思はれま
 す、昔の千歳とか唐崎のころは、香手のほかに杵持と云つて、鬢切り頭をした男の草履取を
 つれて歩いたものでした、今から思へば、あの頃が女郎の全盛期であつたものでせう。

とは云つても女郎の盛衰はどうあらうと、やはりかはらぬは色の道です、いかに孔子さまの
 生れかはりみたいな道學者先生だつて、朝にこの道のあるをきいたら、その夕にはもう通ひ馴

染むと云ふありさま、何も古文眞寶と云つた堅苦しく鹿爪らしいこともこの道にはござる譯合でもなし、どうせ一度は死ぬ命とばかりに、どんな男だつてこのことに勝てるやうな勁い人もありはしません、いやいや、たかの知れた短い浮世ですもの、かうした美君を眺めて暮すのも、まことは長命丸みたいな薬でござんしよう、何も難儀して仙人さまの不老不死の妙薬をさがすやうな手敷もいらぬその近道に、この女郎買ひといふものがあることを知らないのでせうか、……だが、さて初めの咄は何でございましたつけ。

變つた話のつづきでしたな、——子が放蕩な親仁をもてあまし、いくら悪所通ひの意見をしてもおきき下さらぬと云つて、たうとう勘當することにしたと云ふまことに前代未聞のはなしなのです、——その親仁どのと云ふのは、伊勢町の大盃おほさかづきと呼ばれてゐた大盡さまでしたが、大へんお酒の好きなたでした、さう御自分が酒好きなものですから、酔ひ亂れた猩々の醉態を描いた懸け物などを買つて喜んでゐるありさま、このかたの最眞の揚屋は和泉屋半四郎の二階座敷で、それも遊びもここに限ると云ふ最眞ぶりでした、山本長左衛門の抱え妓こもんどで小主人と

云ふのをその相かたにしてゐましたが、二年あまりでもう内藏のはうは大部淋しいものになつて了ひました、年はすでに六十の坂を越してゐましたが、それでも若いものみたいに鬢付けのたしなみを怠らず、ただもう女郎と討死するつもりで金を使つてゐたのです。

ところが、その子といふのはまた親仁に似ない大へんな堅造で、もう二十八になる今日まで唯の一度も揚屋の疊を踏んだことはないといふまじめ一方の伴でした、七つの時の締め初めの祝ひにと絹の禪を中橋にゐた乳母から贈られたのですが、いまにいたるもその一筋の禪を大事につかつて事をすましてゐる、さうした大へんなしまり屋でございました。

それだけにまた伴は稼業大事によく働き、もとはしがたい酒の小賣商でしかなかつたのが、こんにちでは江戸にもならびもののない大酒屋となりました、それも皆つまりはこの伴の働き一つで築いたものでしたが、放蕩な親仁のために大部の金を使はれて了ひ、この調子で親仁につかはれてはとても身上は持たぬと苦にしてゐるのです。

そこで、駒込の旦那寺に念佛講のあつた時、その講中の人たちにこの話をして、何とか親仁

をいさめてもらひたいと親の恥を曝してまで頼みこんだのでありました、聞けば倅の言葉には少しのむりもないことばかり、なるほど世間には不孝者があつて、親が死んだら一倍にしてかへすと云ふ俗に云はれる「死一倍」の銀を借りるものがあるときいてはるたが、親が子を追ひ出して一倍の銀の借りようと云ふ話は先づ聞いたことはない、と、さう云ふ次第で人達も倅の氣持をよく酌みとつて、その親仁にむかつて、そんな昔話にもない非道はあんまりであらう、この後はさつぱりと色里狂ひはやめなされ、と言葉をつくして意見してみたのでした、ところが親仁がその人の意見なぞ肯かばこそ、――

「とても、何と云はれたつてこの道ばかりはやめられさうもない」と、恥ぢる色すらなくて、――

「だが、儂と倅、兩方のことをお思ひ下されせつかく皆さんがさう御心配下さるならば、どうぞこの儂に只今ここで千五百兩の金を倅よりもらつて下され、さうしたら、それを手形に儂はあの家を自分からおん出て、今後一生の縁を切るとうたしませう」

と云ふのぞみであつたのです、あきれ果てた親仁もあつたものでございますが、考へてもそれが一番よさそうなのぞみでしたので、親仁ののぞみのままに話をすゝめて、千五百圓の小判を渡して家から追ひだして了ひました、出る氣になつた親仁も親仁ですが、出すと心をきめた倅も倅、世間は廣いと云ひながら、かういふことはまたとはあるまい話でした。

こんなことを云へば思ひだすのですが、大傳馬町の棉問屋に、女好きの亭主がありました、その内儀さんもなかなか美人でしたが、好きなことになるとそれだけで満足できないとみえまして、ほかに妾を圍つて通つてゐたのです、それを知つた内儀はさばけた氣性のかただったでせう、亭主がこつそり通ふのも氣づまりなことだらうから、一つそ自分の家へ呼びいれたらどうかとすすめ、たうとう妾を家へひき入りて一緒に暮すこととなつたものでした、ところが、その妾はとてもな恪氣持ちで、いろいろ本妻をいびり出し、しまひにはこれを追ひ出して了つたのです、似たやうな珍しいことではありますが、こんなあべこべな話のあるのも、やはり世の中が廣いからなのでござんせう。

また前の話に戻りますが、その後、大盃の大盡の結着はどうなつたらうと聞いてみましたが、千五百兩の金をにぎるともうさつそくその場からすみ町のまんぢ屋の小薩摩に通ひ詰め、後も先も考へる間もない一瞬のうちに、金子一兩ものこさず、まことにさばさばとつかひ果してしまつたと云ふことでした。

そしてこの節になつては、麴町六丁目の横丁に、小ぼけな店を借り、鯉の刺身をつくつて盛り賣をしてゐるのです、因果が身に酬ひたのだと誰一人この親仁に同情なぞするものもないのですが、さう世間から笑はれてゐることなぞにも一かう頓着なく、更に懲りた風もない親仁は色里の文などを庖丁の包み紙にして得々としてゐる仕末、その上、儂の今の心残りは三浦屋の花紫をまだ買つてみないことだ、あの女郎に逢はずに死ぬことは甚だもつて残念だから、是が非でもこののぞみは一生のうちにきつと遂げて見せるつもりさ、年はとつてゐるが、儂はまだかうぴんぴんしてゐるし、この先三十年はまだ大丈夫、たとへ、不養生したつて儂には長生きの覺えがあるんだ、まあそのうちには倅も女房を持つだらうから、さうなりやもう占めたもの

だ、どうせ倅の奴は食ふものも食はずに貯めたほどの身體だから、嫁をもらつたらとても長生きなぞ出来る氣遣ひはない。さうなりや、子のは親のものだから、倅の跡目をまるどりして、再び花紫を買ひつづけたいのが念願ぢや、いつそ一日も早くあの倅めが逞しい嫁御に恵まれますやうにと、この頃では日がな夜がなそのことを無理にもと縁結びの神に願かけてゐることです。呆れた親仁ではありますが、ひよつとしたらこの親仁の願がかなうやうなことがないと云へませんよ。

三、算用して見れば一年に二百貫

奈良の都東大寺門前に、酒質をとつて稼業とする堂々たる商家があつた。

その主は、仙人坊と綽名のある奈良では隠れもない大盡であつた。地元の木辻町の鳴川と云ふ女郎に通つてゐて、浮世の辛さも知らず太平な暮しをしてゐた、もちろん、あり餘るやう

な金の持主だから、その算用なぞしたことはなかつた。

奈良と云ふ所は、一風かはつた土地の風習があつて、女郎は上下の區別なしに一律に十五匁と相場がきまつてゐた、十五匁とさう云へばなるほど知れたやうな僅かな金ではあるが、それでも、氣の持ちやう奢りのしやうでは、どんなにでも早く身上をへらすことができるのだ。

この仙人坊大盡は、五年の間といふもの、京の島原、大阪の新町などは知らぬ唯その地遊びを一方としてゐた。その遊びぶりも、まるで判を押ししたやうに、宵には酒を飲み、夜更けては女郎と共に床に入る、何の意地の張合も色事の出入もなく、味も素つ氣もないものであつた。自然に、女郎のはうも金で身を賣るのだから、まさかはその勤めを拒むことはないが、大盡を輕蔑し且つ疎んじて來る、それを傍^{はた}で見てるれば、大盡の面白可笑しくもない遊興は、土佛の水遊びみたいで危くもあり、情ないものでもあつた。そんなこんなでも、この男が身を持ち崩して十五匁の女郎を買ひながら遣つた金は、七百貫に及んでゐた。つかへばつかつたものだと、彼の身上を知つてゐる者もただ阿然としてゐた。

たとへば、毎日この木辻町の遊女全部を總揚げにしたにしても、十五^{かこひ}女郎十八人でやうやく二百七十匁、その他に一匁から二分までの端女郎が合せて九十七人、その總高銀が五百目、それだけが一日の費用^{かひ}なのだ、それを一年中通してやつて見たところで、百八十貫目で充分足りるのだが、この大盡の金使ひを見積ると一年二百貫餘づつ、それも鴨川一人のために遣つてゐる、どう云ふ風な遣ひかたをしてゐたのだ、——と、これは團扇屋權七といふ幫間が、何の役にも立たぬ詮議ながら、あまりの不思議さに算用してみたことであつた、尤も道樂稼業の粹な奴にも似合はぬ詮議立てであつた。色里で費ふ金の勘定は、はじめからして世間一般の勘定とは違ふものなのだ。

いや、出費と云ふものは一體がさう云ふものなのだ、人の世帯生活にしてからが、飯米の代よりは小遣のかかりが多いと云つたもの、女郎買ひをすれば、揚げ錢よりはその以外の數々の物入のはうが遙かに大きい。尤も、靈地の佛前に石燈籠を建立したり、神前に水鉢を切据ゑたりして、それに獻納者の名を刻んでおけば後々までもそのしるしは残るのだが、女郎買に使ふ

金だけはどうにもその使途の書き残しよはないのだ、一萬貫目つかつたからと云つても、その使ひ道なぞ人には判るものではない。

さて、この仙人坊大盡も今までの地遊びにも飽いたのか、奈良より忍び駕籠を仕立て、女郎を十人ばかりも引連れて京の色里へ上つて見た、その一度が病みつきとなつて、それから幾度となくこの忍び駕籠の行列であつた。一道中するだけで、優に百兩の金では足りなかつたと云ふのだ。それに反し、同じ奈良の市中には、玄米の打込茶などで辛抱してゐる貧者もゐるのだ、また死病の床に臥し、今生の思ひ出に鱧の刺身一切をたべて死にたいと哀れな願ひを云つてゐるものもあつた、或ひはまた大阪の觀進能へ地謡の役に雇はれて行つた歸り道、鹽を土産にしてくる者など、こんなに仕末の堅いところを見たら、とても一日とて暮せさうな場所ではなかつたが、同じ奈良でも所々により人により、その生活も違ふのであらう。このやうな大盡もある位だから、やつぱり古都の繁昌の面影が残つてはゐるのだ。

さうかうしてゐる中に、この仙人坊の大盡も、あるだけの身上を片付けて了つて、今ではそ

の昔の名残となるものは、彼が身受けて寵愛してゐた小野島といふ女郎一人だけであつた。一人の召使も使ふことなく、そののちは、元興寺の東町に移つて、世を侘びた生活、その日暮しの糧に燈心を引いて、細々ながら世を送つてゐた。だが、感心に、小野島はこんなになつた仙人坊大盡を見捨てず、昔の綺羅びやかな形なりをやめてつぎはぎの帯になりかけ、古風呂敷を前垂に作り直して甲斐々々しく働いてゐた。貧乏人の手仕事などは別に習はなくとも、その身に落ちればすぐ覚えられるものだが、昔、琴三味線ひいた指で、今は石臼の挽木も握つてゐた。思へばまことに悲しい生活となつたもので、時々は竈に煙の立たぬやうな日もないではなかつた。だが、それでもなほ女は悲しさうな顔もせず、男を大事によく仕へてゐた。こんなになつても、大盡は日に三度の酒をきらすことができず、その時その時になると、女は缺徳利をさげて一度買ふに六文づつかかる酒を求めに町へ出て行つた、——その女郎の姿を見ては、いままで誹つてゐた人までもすつかり打たれて、涙をこぼして感心もし、氣の毒にも思ふやうになつたのである。

かうして月日は流れる中に、因果なことには、ふと女の月のものが止つて了つた。この貧乏世帯には慾しくはない子供であつた。産月が近いて來ると云ふのに、何の用意もできはしなかつた。さあいま、と蟲がかぶつて來ても、まだ産婆に來てもらふ約束もしてゐなかつたのだ。それでも、男が自分で女の腰を抱いてやつたり、湯を沸したり、どうにかかうにか一人で間に合はすことができた、——ほつとして見れば、産聲のあげようからして、利巧さうな男の子であつたので、夫婦はもう大へんな喜びやう、まだ生れたばかりと云ふのにもう末の頼みをこの子にかけるやうなありさまであつた。それにつけても、二親は思ふのであつた、——運だから仕方がないものの、この子が若しもう一二年早く生れたならば、それこそおんば日傘で、綺麗な小袖を着せてやり、お宮詣りなども美々しく立派にしてやれたであらうに、こんな落魄して了つた今の境遇の中に生れて來たのでは、新しい産衣一枚買ひ求めてやることも出来ない、それを思へばなほいぢらしい子供であつた。

肌着に紙子の切々かのこ きれきれなのを繼ぎ集めて着せ、その上に、お祭の折こしらへた玩具の具足をつけ

させ、まだ二十一日の忌もあけないのに、鎧の着初をさせたのも、可笑しいと云へば可笑しかつたが、これも親心なのだ。いまは世間を恥じる見華も外聞もない彼等であつたから、親仁はその子を肩車にのせ、春日神社にお詣りに行つた。明神さまもその昔彼の全盛の時を御存じになるのだから、この姿を見ては嘸かし不慙にお思ひなされてゐるだらう、と思つた彼と顔見知りの神主達が、——

「これはこれはおめでたうございます」と、手を拍つて祝つてくれた。

「これが惚れた女郎の腹から生れた若君だよ、よく見てやつてくれ、……」

と、男は具足の草摺をあげ、皆の者に自慢らしく子供のおちんちんを見せる喜び様であつた。それから後も、ながくながく小野島はこの男を見捨てずに連れ添ふてゐた。一度苦界から身を救つてくれた男の恩のほどを忘れずにかほどによく勤める貞節な女だと、世間の感服の的となつてゐたが、その後何かの動機があつたであらうか、二人とも發心して、秋篠の里の片ほとりに移り、ものしづかな餘生を送つてゐたと云ふことである。

卷の四

一、江戸の小主人京の唐土

世間は廣い、關東の奥へ行くと、今でも米一石が十八匁しかしない所がある、そんなところでも、またそれなりにやつぱり暮しかねる者もあつて乞食がゐると云ふことだ。また大江戸に住みながら、生涯小判といふものを手に持つて見たことのない者もあるのだ。だが、その一方では、一日五兩宛の悪所遣ひをするとし、一代の命を六十五に見積れば、自分からはじめて二十八代の子々孫々まで身代がつづくこと勘定して、揚屋を我が家と心得、親の命日の日のほかに

は家の鬨をまたがぬやうな人間もゐる。しかし、こんなのはもともとが間違ひなのだ、そんな無用な身代自慢はきつと飛んでもない算盤ちがひになるので、いづれは一文なしの素寒びんになるのにきまつてゐる。

それにつけても、當節は昔とかはつて、世間一般が利巧になり、世智辛くなつてきたので、金儲けをすることも實にむづかしくなつてきた。だからまた儲けようと思へば、人の眞似せぬことか、一風かはつたことを工夫しなくては駄目だ、最近のことだが、金龍山の茶屋で、一人前五分の奈良茶漬を賣出してゐた、その器うつはものもなかなか洒落れたものであつた。ああいふ趣向のものは上方のはうにはちよつと見當らない。それよりもなほ流行したのは、清水町の隠し賣女よねであつた、價百で酒肴のもてなしまでもする趣向であつた。また、深川富岡八幡の茶屋女は、本所築地よりは隔段のひらきがあるほど見華えるもので、大たいが京の祇園町の風儀に匹敵するものであつた、鳥居を境にして、その内と外では値も違ひ、内は二人一步に外は三人一步と云ふ定めになつてゐた。

かうして見ると、江戸は女の少ないところときいてゐるが、大へんな違ひで、行くところどころに仲々氣の利いた遊び場所があつた。吉原は江戸隨一の遊里あそびのこととて、ここは皆格式ばかり重ずるところかと思へば、新町河岸の枯暖簾わかの分れば、銀なら一匁、錢なら百と安直な相場がきまつてゐた、値が安いからと云つて、しかし、別して女郎の意地と張りには變つたところはなかつたし、腰のものもちやんとした絹ものを巻き、鼻紙も立派なはし切りもの、おちよぼ口に喰へ揚子の風情など、三流四流なればとて流石は遊女のつくりは格別なものがあつた。

或る時のこと、揚屋町へぶらりと現れた髭の長兵衛大盡が、縁先に腰かけ姿で、

「大分久しぶりでここに來たのだが、お内儀はまた大そう美しくなりましたの、この分ぢや亭主はよつぽど身の養生を心がけにやねえ」

と、罪もない悪口を云つた後は、皆の者も大笑ひとなつて酒が始まつたのであつた。そのうちに、座敷に太夫の小主人こあんども姿を見せた。太夫を相手にいろいろな色話の末、長兵衛大盡は、――

「なあ小主人、そなたのいい人は上方で別段かはりもなくしてゐるのかえ？」

と、水をむけ、――「さうか息才なのか、いやさ、息才すぎて、あちらでもなかなか發展なさうぢやないか、京では一文屋のいま全盛の唐土太夫かうこし、大阪では扇屋の萩野太夫に大部な熱のあげかたなさうだよ、だがもうやがて歸つて來られるだらうから、さうしたらゆつくり穿鑿してやるがいいよ、少しは身體の痛いぐらゐる抓つてやるんだな」

と云ふと、小主人はそれに答へて、――

「いいえ、その唐土と萩野さまは、わたしから名ざしでうちの人に逢はせた太夫でございますの、今日もじつは傳馬町の清さまきよから、唐土さんの御たよりを届けて下さいまして、珍しく拜見いたしましたの、こんなことが書いてございましたわ、……暫くの間、大事なお殿とよをお預りいたして、ほんとにいとしく存じてをります、ところがこの頃は少しばかり浮氣の熱が昂じなされましたか、どうしてもわたしに誓紙を書けと云つて、いかにも本氣らしくお戯れになられますので、わたしも少し小憎らしく思ひまして、江戸のそなた様に云ひつけてやると嚇しまし

たら、いや小主人こまんどはもう死んで了ふた、とさも尤もらしく偽せの戒名まで書いて、わざわざわたしに見せるのでございますの、腹が立つて來ました餘り、それならば、せめて三十五日なりと御精進なさるのがお情でございますと、申しあげて同じ床にはいつでも肌を許しませんでしたの、それにはすつかり閉古たれなさいましたのか、この頃はしきりと詫言ばかり申してをられます、可笑しいやら何やらでございますが、そなた様からお赦しの御手紙が來ない間は駄目と、唯今でもあの方の御言葉には従はずにをります、けれども、あなた方の幾久しいお睦じい中は見る眼も羨しくてなりません、さてをはりに、本町の井筒屋の二六さまには、そなた様はもう六七度お逢ひなさいましたさうでございますが、あの方はわたしとは深い仲の間、なにとぞ逗留の間は首尾悪しからぬやうお頼みいたします、と、かう云ふ文でしたの、考へれば、ほんとに、山河百里をへだてた遠い地にゐながらして勤めの身にゐますと、先方に自分の肌の墨子ぼくろのことまで知られてしまふなんて恥しいことすわ、京のことも、ここにかうしてゐることも、全く蛇の道は蛇でございますわ」と、云ふ小主人の打明け話に、座も興に乗り、

大盡の口添酒も日頃よりは一そう旨く、なかなか御機嫌であつた。

「なるほど、なるほど、なかなか洒落た話を御馳走になつたよ、一がいに云へば、そりや女郎なんて勤めのために身を賣るものなのだが、さうした辛さの中にも、時折は忘れられないほどに思ひをかけた男がゐればまた楽しみもあるのだらうよ、何にしても馴染が第一と云ふものだ、この俺も、一時はすみ町の小藤に夢中になつて請け出す手筈の相談までしたのであつたが、ちよつと事情があつてのびのびになつてゐるうちに、小市と云ふ男に出し抜かれて了ひ残念な思ひをした、いま一度だけでいいから、堅氣になつた小藤の女房姿を見たいものだと思つてゐるのだが、てんでその行方が判らなくての……」

と、大盡はもの悲しさうな顔色であつた。すると、その一座にゐた正月の道安と云ふ按摩が口を出して、――

「おや、さうでしたか、大盡がそれを御存じないとは迂濶でございましたね、その戀種こひぐさの行く末はこのわたしが尋ねて存じてをります、そのかたが戀しくおいでならば、柳原のとしま屋へ

行つてごらんさいませ」

さて、その按摩の道安から話をきいた大盡が、人知れずその女を見に行つて見た。今はもう世帯持ちとなつた女は、その遊女時分には手にすることもなかつた鹽なども買つて、自分でその錢を渡したりしてゐるのであつた。その堅氣な姿もなかなかいとほしく、大盡はあの女の亭主の今の楽しみも深からうと、ひどく羨しく思つたのだ。だが、待てば海路の何とやらもないとは云へない、もしあの男がいつか女に飽いて手離すことにもなつたら、その時は自分が貰つてやらうと、あさましくも、大盡は立願して、淺草の觀音へそんな無理なことを祈つたりしたのであつたが、残念ながらその靈驗はあらはれなかつたのだ。

人がそんな情ない噂をきいて、いかにもたはけた願ぐんをかけたものだと思ひ意見したのだ。柄にもなく、太夫格子女郎などに望みをかける愚かしいことはやむべきだ、出來ない時は出來ないなりに散茶女郎ぐらゐで我慢するのが本當、それだつて結構一時の慰みとなるのではないかと云ふのであつた。元來が相當強よ氣の大盡であつたけれども、この頃ではもう遊びの金にも

事缺くほどになつてゐたので、口惜しいながら、その後は吉原へもあまり姿を見せることも出來なくなつた。

その中、いつとなく中橋の隠れ笠といはれたほどの通人であつた彼も、金はいつまでもあるもののやうな亂暴な使ひ方のために、揚屋町と差引勘定したらもう何一つ残らぬほどに借財もかさなつてしまひ、吉原へは行くこともできなくなつて、この節ではせいぜい端錢の時賣、むかしはそこへ通ふ奴を笑つた本町河岸の淫賣宿へ通ふ身となつた。

さう云ふ下級の色町へも、通ひ馴ればまたその氣になるものだ。或る時、折悪しく降り出した俄か雨のかへり道、別に駕籠を雇ふでもなく、徒歩きの草履をぬいで、それを紙に包んで腰にさし、ぬいだ足袋はふところへ突込み、見榮もかまはず尻端折り、柄のもる傘を貸してくれたのが、せめてものあの女の情だとばかり、昔に變る佗びた姿も却つて楽しいものに思ひながら、土手の闇がり道をひたひたと歩いて來ると、ふと、うしろから大勢して賑やかに追ひ抜いて行くものがあつた。いづれ廓へくり込む連中と見えて、揚屋の男を三人連れ、提灯のしる

しは花菱であつた。どこの大盡か知らぬが、供のものがさしかける傘に大袖の雨合羽を着たりした豪勢な様子であつた

(うむ、うらやましい奴だ、一體どんな男だらう……)

さう思つて夜目をすかして見れば、その昔自分の親仁の代に使はれてゐた喜平次といふ手代であつたのだ。自分には何か氣に入らぬところがあつて、この手代を追ひ出したものであつたが、それが彼には幸ひとなつたと見えて、いまでは太夫を敵娼に出来るほどの全盛な男ぶりとなつてゐた。

是非もない浮世、生きてゐても面白くないぞと悲しく思つた。さう一時は思つても、いつも明けてその朝となれば、もう何もかも忘れ、この道から身を避けることは出来なかつたものだ。だが、今日は、よくよくの因果なのだと得心し、こんな思ひをした今晚こそ天の戒めと、これ切り確かに誓文立てたと決心したのだつたが、それもやつぱり駄目であつた。翌日ももう身體を掴まれてもしたやうに家を飛び出し、人目も恥ぢず本町河岸に通ふのだつた。

その河岸の吉之丞と云ふ一匁の賣女と、以前の太夫狂ひの時分よりもよく氣が合つて、彼は泌々とした情をもつて通つてゐたのだ、今はもう捨て難く、離れがたい仲となつてゐたが、その女も漸く無事に年期の奉公もすまし、禮奉公に一年更につとめ、もういつでも自由な身體になれるのであつた。ただ借錢四十六七匁が思ふやうにならぬばかりに、かなり長い間そのまゝになつてゐたのであつた。大盡のいまの働きはどうにも算段がつかかなかつたか、うまいことにはどうかした拍子でか残つてゐた寢覺提重を見つけ、それを賣り拂つてやうやく金を整へ、吉之丞の萬事のかたをつけて、引とることになった。

今日からは晴れての女房と、横山町の裏長屋に夫婦の生活をたのしみに、紙の貰入れを縫ひ習つて、それで心細い暮しを立てることになつた。

夏は蚊帳もなく、冬は綿入もなかつた。そんな貧しい暮しを重ねてゐるうちに、三年ごとに一人づつ子供をもうけ、それもいつか四人まで娘をつくつたのであつた。でなくとも苦しい夫婦の暮しに、こんな娘ばかりの子供ができて、情ないことであつた。

遊女に子供はできないものと聞いてゐるが、世の中のことは何一つとして本當なことはないなぞ、と思つたつて今更はじめらぬことであつた、餘り子供も可愛くはなく、むしろ愚痴の種となるばかりであつた。かうして狭い部屋に起き臥してゐては、人は何と思ふか知れないが、すでに十一年の間、夫婦の交りすらすることもなく、まるで夫婦と云ふも名ばかりの生活、この位なら昔のままのほうがよかつたと思ふことさへあつた。

二、茅屋の琴

女郎を請け出すと云ふことにも、そこには一つの意地張りがあるのだ。

つい最近のことだが、京に三木と云ふ男がゐる。島原に通つてゐるが、妙な意地心から、當代の一文字屋の唐土よりは上林の金太夫がよいと云つて、それを相かたにしてゐた。

上林の金太夫は、何とも形容の出来ぬ美人であつた。二三度首尾の後のこと、酒に亂れたま

ぎれに、彼は一步の金をさも大切さうに取り出し、彼女にくれたところが、

「これは、これはありがとうございます」

と、嬉しさうな顔つきをして、そつと受取つたのである。これを見た三木は、都一の伊達者と自任してゐるだけに、ちらりと眼を光らせ、心の中では、太夫らしくもない顔付き、いかに女郎とは云へ金を見て顔色を明るくするとはさもしい限りだ、と思つたのであつた。――

それから四五日経つてのことだ、今度はわざと、熊谷盃の大ぶりなものと、珊瑚珠の盃を重ねて太夫にくれてやつた。きつと大喜びするだらう、と思つて見てゐると、今度は金太夫は更に嬉しさうな顔色をせず、金盃のほうは庭掃きの下男にくれてやり、珠の盃をば双六盤の下へ敷いて微塵に碎いて捨てて了つたのだ。これを見た三木大盡は、前日の事は欲も得もない太夫の無邪氣な心であつたのだと、今さら感心し、ただそれだけの心意氣に感じてさつそく金太夫を身請したと云ふことであつた。

この大盡は太夫の五人や七人の身請けをしたからと云つて、その身上にひびの入るやうな身

ではなかつたが、その少し以前の長崎の鹿といふ大盡になるとそんな身上持ちではなかつた。先代の吉野太夫に通つてゐたが、馴れ染めのそもその日から互ひに言ひ交した深い仲で、いづれは自分の本妻にしよう考へであつた。仕合せな女郎もあつたものであつた。

この大盡は、三條の唐人屋と云ふ兩替屋に銀三百貫目預けておいておいた。どこか都のうちによさそうな所と方々を探して、そこに家屋敷を立て、一生これだけあれば大丈夫と思つて取つておいた三百貫であつたが、それもいざ吉野太夫を千三百兩で身請けし、萬事の付け届などをすまして見ると、僅か七貫目残つたきりであつた。たつたそれだけの身上で、この大膽。まことにこれは好色第一等の男であつたと思はれる。

いや、この大盡がそれだけの思ひ切つたことをするだけあつて、吉野太夫はまたよろしい女であつたのだ。昔から特別に遊女らしい遊女の風俗があると云ふわけでもなく、それほど口説上手と云ふほどでもなかつた、見た眼には弱々しかつたが、それでじつは仲々強く、その上情が濃いと來てゐたから、とてもものに、時たま逢つた男もこの女の情だけは忘れられなかつ

たのだ。だからまた、多勢の客の中にも、いい折を見合せてこの女を根びきしてやらうと思つてゐたものも、實に多かつた。それがたうとう鹿大盡に身請けされたとなつてからは、それを悔むあまり島原通ひを諦めて了つた者もあり、また吉野太夫のゐないこの色里などには未練はないと、四條河原の野郎買ひに轉向したのもあつた、とに角、吉野太夫の身請けの後には、京都中の遊野郎連中はそれぞれ多少なりとその打撃を感じない者はなかつたのだ。

身請されて後の吉野は、姿もすつかり堅氣の女房につくり、難波の梅の見どき、天王寺の花の晝、或ひは谷町の藤の夕べといふ風に、春夏秋冬なしにそこらここの遊山に連れて行つてもらつた。御所かづきを深く被り、つとめて身のふりを飾らぬやうし、男あしらひも知らぬ初心そんな風情をして、黒羽二重の模様なしの小袖に龍門の帯も目立たぬやうにしめてはゐるが、それでもなほ吉野の姿は見立つのであつた、姿自慢の女の群も、吉野のこの忍び姿にさへ敵ふものもなく、男共はいかなる名工がこのやうな美女を造つたのかと、ただもう吉野だけに見惚れるありさまであつた。全く、かう云ふことにかけては、世間の眼も思ひの外に賢いと、

いま更に感心される、わずか五尺に足らぬ身體で、特別の別製といふ譯でもあるまいのに、すぐそれと小判でのべた上製品のやうに見分けるのだから、恐しいやうなものでもあつた。

しかし、吉野はじつにそれほど的美女でもあつた。そののちのこと、大盡の生國長崎へ、船路を連れてゆかれることになつた時のことだつた、讃岐の泊の磯といふところにさしかかつた時、夏の夜のことであつたが、忽然として月影穩かに白砂を照らす波間より、龍女があらはれ、

「京の吉野を見よう」

と叫ぶ聲が、虚空にひびいたと云ふ、——ことほどに吉野は美女であつたし、この咄でほぼ吉野を見ぬ人にも、彼女の面影が忍べるであらう。

それは洗足の湯を七厘釜で沸かしたり、刺鯖さしほを十一月頃になつて辛つと食へるやうな貧乏人からみれば、たかが女郎一人のためにと、馬鹿々々しく思はれるかも知れないことだ。だが、また、我男と生れたからには、こんな日本稀代の名女郎を手活けの花とするに越した何の樂し

みはあらうごとも云へやしないか。

この大盡はほかに野風太夫も身請けして、伏見の里に住はせておいた。吉野太夫のはうは、東山の片ほとり、粟田口に近い茅屋、都から少し離れた閑靜な住居であつた。彼はまだ男盛りであつたが、それを法體に改め、月の眺めにも花の眺めにも、吉野を相手に朝夕ともない樂しみを共にしてゐた。太夫に手づから、茶を煎じさせ、全くの水入らずで、碁の相手、楊弓の女、暮には鞠つきなどをして樂しむのであつた。夏の風待つ涼み床には名木の香を焚きしめ、初雪の朝には歌に心を導くといつた按配、世にあるすべての風雅風流な遊びはしつくし、雨の折なら杜鵑も啼けよ、夜の慰みには螢も飛べ、といふ逸樂、時にはまた夫婦そろつて京菜の漬物など慥へ、寢酒の肴にすることも一入酔心地を樂しませるよすがでもあつたのだ。

或る年も暮れかかつた頃のことであつた。五條の市いちと云ふ大盡が、まだ年若い花の盛り時分から未だに契りを重ねてゐた、左門といふ女郎を身請けし、自分も隨分したい三昧な氣樂な生活いぢを自慢に思つてゐる男であつた。これがその女を連れて年籠りの伊勢詣りを思ひ立ち、鹿大

盡と吉野太夫の住居する粟田口をとほりかけたことがあつた。

むろん、年籠りと云つても、ほんと信心からではなく、榮耀榮花をのぞんでの贅澤な旅遊びであつた。世間では暮をひかへての大へんの忙しさの最中に、こんな旅にでる者などは、恐らく京都でも自分が一人であらうなぞといひ氣になつて、粟田口を通つた時、小家がちなそのあたりも正月仕度でざはざは忙しさうにしてゐるのに、ふと、耳に傳つて來たのはのどかな琴の音であつた。

琴の音かしら、暮の二十九日のこの忙しさの最中に、或ひは貧しい家の棉弓の音かも知れないと、不思議に思つて、そつと笹戸の蔭からその家をのぞいて見ると、吉野の美しい姿が眼に映つた。昔よりも更に更に美しく、氣高くなつてゐるので、この男はすっかり昔の彼女の面影を見違へて了ひ、どんな公卿さまがここに身を隠して住ひなさつてゐるのだらうと氣になり、東隣りで火繩を造つて賣つてゐる者に問つて見ると、――
「長崎の大盡と吉野が連弾きをなされてゐなざるのぢやよ」

と、彼等の暮しぶりのあらましを云つて聞かせた

（ああ、流石なものだ、このおほどかな暮しぶり、それに較べれば自分なぞまだまだこせこせしてゐるのだ……）

と、感じ入つて了つた彼は、そこから伊勢へ行くのを取りやめにして京へ戻り、大晦日の日、女の歌舞伎ものを總揚げにしてどんちやん騒ぎをしたと云ふ、――人真似したその心もをかしなものであつた。

三、戀風は米のあがり

大阪の浮世小路には、新町の廓へかよふ駕籠の立場があつた。

そのこの渡世人の「めつた的」と徳兵衛、「盆」の長兵衛などといふ連中も、この頃では、色里通ひの客も滅多になく、とても暇であつた。たまにあれば、これは牧方の在所あたりへ行く

客、二匁五分の駄賃をもらつたつて、こんな客種ばかりではとんと埒もあかぬ氣持であつた。いい加減に腐つてしまつて、或る日、ぶらりと野つ原へ、出て見ると、畑の唐黍の根ざしも浅い、今年は強風のないしるしであつたのだ、この分ではまた今年の米相場も平穩ときまつたやうなものであつた。

一體この頃の大阪の岡場所の景氣は、北濱の米相場にかかつてゐた。天職女郎から十五女郎にいたるまで一人の賣り残りもなかつたり、かげまが流行したりするのも、この北濱の若い衆がばつと威勢立つた時だけのことであつたのだ。

雲行がどうやら怪しくなり、つづいて降雨があると、あとはもう風だ、——厄日は大嵐にちがひないとばかり米の思惑買が一時にどつとつづけられる。たちまちの中に、相場は二匁ほどぴんとあがる。あとはどれほど相場が上るか判らぬが、まづこの調子ではと、儲けの胸算用よろしく、晝のうちからもう大へんな駕籠、三百挺も物凄**い**ばかりの勢ひで悪所へと乗りこまれる。俄かに、あちらこちらから女郎の貰ひがかかり、またふだんは隙で仕方のないものまで思

はぬ仕合せを見るありさま。揚屋は一刻一刻と景氣立つてき、客と一しよになつて、風の神雨の神に祈禱までする仕末。

ところが、厄日のその夜になつてみると、からりと空は晴れ渡り、青雲も靜かに月も清らかにのぼつたのだ。

哀れ、……どこでも申し合せたやうに、小唄三味の音もびつたりとやむ。俄か大盡氣取つた連中の顔の色は、かはつて、見るも滑稽なものであつたし、そんな客の相手をつとめた女郎の悲哀も、まことに氣の毒みtainなものであつた。

こんな俄か大盡とちがひ、同じ北濱でも、太夫の奥州を身請けした大盡とか、あづまを山本に根引きした大盡となると、これはまた自ら異つたもので、女郎もかう云ふ本當の大盡にかかれば出世といはれるであらう。この頃では、椀久みたいなああいふ少し抜けた者を女郎も相手不足のやうな顔つきをしてゐたが、それでもちやんと自分の持ち金をふんだんに使つて、太鼓その他の者にまで嬉しがられるやうなものを與へてゐた。

それに較べると、此の節の遊び人は随分安直になつて、太夫に逢ふ時さへ幫間を連れて行くこともなくなつた。當節の風儀か知れないが、着物さへ木棉もので色里へ行く人もある。こんな人は、どう云ふ了簡か判らないが、兎に角、女郎買ひのすることではなさそうに思ふ。下帯の古いやつをしめてゐて、てん怡としてゐるくらゐだつたら、なにも面倒な足を運んで女郎通ひなぞしないで、己が女房でも楽しんでゐれば事充分な輩ではないか。

女郎狂ひでもする位の考なら、せめて、衣裳好みなどをする洒落氣がなくちや駄目だ。そんな男と相かたする女郎の身になつたら、まるで同じ米ながら搗きもしない玄米を喰ふやうな味けなさ、女郎が厭やがるのも無理もないことなのだ。女郎にしてもさうだ、いかに節約第一の世の中だからと云つて、女郎がその着物に襟をつけて着てゐるなんぞでさへも、女に眼の肥えた客の眼から見れば、何ともむさ苦しくてならぬのだ。

さうは云ふも、實際に今どきの客の遊びぶりは情なく、悲しく思はれるやうな手配が實に多いのだ。高の知れた身上で、親から譲られた老舗商ひをしてゐる者、職人なども皆一家のも

の、また多勢の弟子などを朝晩酷き使つてお互ひに助け合つて辛く家計を維持してゐる者、かう云ふ人達の生活と云ふものは、豫算がきまつてゐて、節約第一にと米も加賀の大ひね米或ひはりうまい、赤米とかを常用し、百五十入の安小やすこあぢ、惣菜も一食一文以内であがるやうにと心掛け、薪にしても船造り場の木つ端が徳用だと氣をつけ、燈油も鯨油ものがよいなぞとまるで爪に火を點すやうな節約、取葺屋根とりかきのざざ漏りするのさへすでに四年もそのまま辛抱してゐる、——と云つたかう云ふ手合の人の女郎買ひは、まづ分別のほかではあるまいか。それなのに、茶屋遊びなどは出来るはずもない者が、何を了簡違ひしてか、お洒落して天神買ひに出かけたりする。それに入用の三十目は、家中の者が汗水流してせつせと働いても、五日はかかるほどの金なのである。そんな無理な金を使った後は、二日の拂日に事かき、連れ添ふ女房の寢巻、蚊帳の果てまで質草に入れてどうにか間に合せる、それならばまだ増したが、その上、その二日の拂日を年中二つづつ先繰りに借りてゐると云ふ仕末になるのである。

かういふ遊び客が、月見の酒盛をしようと心がけたりする。

（——幸ひ仕事も隙だから、こんどの名月にや一つ繰り出して見ようぢやないか）
と、揚屋に出かけたとすれば、先方では、

「おありがたうございますが、何分前の御勘定が、へえ、それを片付けて下さいました上で、
お願いいたしたいものですが……」

と、素つ氣もなく出られて了ひ、致し方もなく諦めて歸らうと思ふ。だが、思ひきり諦めにくくて、とやかう思案の揚句は、——

「ほかの日でもない月見の晩だから、ならうことなら、何とか女に逢はせて下さらんかな、自分もこの二十七八日には、ちよつと金の入る確かなあてもあるんだし、……さう云へば、こちらの家には銀戸かど棚だながないやうだね、入用なものだらうから、わしが木を吟味して一つ儲へてあげませうか」

と、云ふと、

「どういたしましたして、私のところはこの錢箱で事足りますから」

と、膠もなく、そつぽをむいたままでの返事である。それにもなほこりず執拗く、——

「——何とな親仁どの、別の話だが、この節はどこの家も値上りになつたものでしてな、わしの町内でもこの間二貫目ばかりの屋敷が賣りものにきまりましたよ」

「さうですか、あなたのお宅ではどの位お借りになりました、どうせ大した口錢でもありませんが……」

と、やつぱり脈がないのであつた。

「——いやまあ、親仁どの、さう野暮を云はずにさ、わしは外に借金があるわけぢやなし、どんなことがあつたつて、こちらの家へは迷惑をかけぬから、月見には逢へるやうにしてください、頼むこの通り……」

と、云ふのであつた。

何とも不愜な大盡もあつたものだ、揚屋から勘定のことを云はれたからと云つて、自分から平身低頭して女郎との逢ふ瀬をたのむ、さりとほ情ない男だ、あんなていたらくで女郎買ひし

たつて、何が全體面白いだらう、とそこの揚屋の者達が嘲笑ふのであつたが、親仁だけはその時、鹿瓜らしい顔を崩さず、――

「今ごろの大盡さまは皆ああなんだ、昔のやうに金に糸目をつけず、氣持よく遊びに來られたやうな大盡などは、今の廣い大阪にも物が五人と、見られませんよ、みんな遣り繰り算段の火の車世帯なのだ、あとは火となるのもかまはず、恐しい周旋屋に書付を出して騙りかた半分の借錢をしたり、或ひはうまく立ち廻つて呉服太物などの掛買をしながらそれを安く賣拂つて現金にかへたりして、わし共への勘定をするとか、或ひはまた決算期日のやかましくない藥種をたんと買付け置き、それを藏ごと質に入れて金をつくるとか、皆そんな虎の子渡しみたいな苦しい遣繰りをして、女郎狂ひにかかられるのだから、一時凌ぎは出來ても、いつか一度はきつと巨きな難儀に逢つて、二度と立ち上ることができなくなるのですよ、そのため、わし共揚屋連中までも餘計なとばかりを受けますし、此の節ぐらゐさうした悪評迷惑を蒙ることはありませんでしたらう、それにわし共が見込んで、これはよいお客さまとよく訊して見れば、飛んでもな

い世間の鼻つまみ者だつたりしたこと一人や二人ぢやありません、その度に揚錢夜食代は愚か、御所柿までも結局は食はれ損といつたひどい目に逢はされます。

これを思ふと、昔のお客はおほやうでした、女郎の色戀の談判ばかりしてゐましたからな、それなのにこの頃のお客と來ると、すぐ御自分の懐具合を女郎に聞かせるものだから、さうされれば女郎だつて、そこは人情でものがありますよ、お客を氣の毒に思つて餘計な金は使はせぬやうにしますし、またよし紋日の勤めをして貰つたにしても、その支拂のかたがついたと判るまでは、おちおち眠れぬほど心配してゐなくてはならぬなんて、女郎も可哀いさうなものです、だから自然に女郎だつて考へさせられますよ、假の契りではあるけれど、男をさう憎みも嫌ひもしてゐる譯でもないのに、揚屋との首尾の拙くなるのが厭やなばかりに、その客のあらをわざと見つけ出して、裏うちつて織のある肌着をきてゐたから愛想がつきたの、龍門の羽織に木棉わたがいてゐるやうな野暮だから厭ひになつたのと、何ともはや、譯の判らぬ時勢になつたものですよ」

と、まるで、女郎と揚屋とがすっかり一つになつて了つたやうな世の中となつたのである。これを思へば、昔の金持連中があまり奢り過ぎたからなのだらう。が、兎に角、本當の大盡と云はれるやうな大盡の種切れとなつたのは事實であらう。

その昔、刀友と云ふ大盡は、太夫の妻川のもとへ、一度に三十揃への衣裳を届けてやつたとか、布平大盡が小太夫に黄金の櫛箱をやつたとか云ふ眞似は、今日では到底出来ないことなのだ。その當時は世間の笑ひ草となつたものであつたが、とま大盡がその下屋敷を四十五貫目で賣つたその銀を、そのまま役者に背負はせて吉田十郎兵衛の宅へ行き、ばらりばらりと惜氣もなく撒いてくれたとか、また、高大大盡が零落の後は黄肌染めの小袖に紅裏をつけたのを尻からげにして雑木の割賣りをして暮したとか、泉平大盡が千之助を請け出して後は酢醬油の店をひらいて一合賣りのしがない渡世をしてゐたとか云ふ逸話も、いまでは女男の道を俵ばれるやうな儂ない語り草と化して了つたのだ。

卷の五

一、女郎がよい野郎がよい

油太と云ふ大盡が、一日、大阪南江の一流茶屋に遊んだことがあつたが、鐵眼和尚建立になる慈靈山瑞龍寺の巨きな釋迦堂を眺めながら、――

（莫迦な金を使つたものさな、あれだけの釋迦堂を造る金があつたら、島原新町の兩所の色遊びをしたつて、揚屋の亭主にさへ隨喜の涙をこぼさせるほどの見事なさばきができたらうにな、後世の願ひなんて考へりや可笑しなもの、判りもしない死んだ後のことなんか結局は無駄

ではないか、尤も色里の夜見世の趣味が判らんからだらうけれど……)

と、ぼんやりとそんなことを考へたりして、酒をのんでゐるが、何となしに氣持が滅入つて淋しかつた。こんな時は無理をせず、銀一枚ぐらゐの散財で歸らうかと始末氣なども起きかけてゐるとき、ふと、鑢鉢や鉦のやかましい音を耳にし、また火葬場の煙の立つてゐるのを眼にした。その途端にまたふつと氣持が變つて了つたのだ。

「これ亭主どの、どのかげまでもいいから、あいてゐる連中を皆呼んで遊ぶとしようよ」
と、油太の大盡が亭主に相談を持ちかけるやうな態度をした。

「さうですよ、だが、旦那、今日は一つ私が趣向を立てませうよ、いつもの藝子かげまなんか今日はさらりとやめにして、京から來ました旅役者はどうせう、皆様誰も顔見知りない者ばかり七八人取寄せ、ざつと踊りじまひにして、あとはあつさり蕎麥といふことにしましてな、そのあとは一と風呂お召しなされれば、もう日も暮れませうし、それからは夜見世で思ひざまと云ふところは、いかがでせうな」

と、亭主は野郎のおかげで渡世をしてゐながら、それにも似合はぬ女郎買ひすすめをするのであつた。

だが、大盡は、

「この身のほど知らず奴！」

と、大きく笑つたきりで、厭とも云はなかつた。——その京の旅役者を皆よぶことになれば、一夜の慰みをつとめる女郎みたいに借錢はならず、現金の拂ひをしなければならぬ風習であつた。

それを、幫間たちは、大盡の奢りで自分達は無料でお相伴遊びをする癖して、妙に氣の毒がり、かれこれ心配らしいことを云ふのも可笑しなものであつた。

すると、亭主は、

「いや、なにもさう皆が皆までよんで、餘計な御散財はしなくてよろしいんで、御自分御自分で好きなのをよべる手がございますよ」

と、皆の者を案内して、納戸の戸口をあけて見せたのだ。

そこには、いろんな張紙がしてあつた。——先づ、今宮の十日夷のお札から、日待山伏のお札、眼病の妙薬、柱曆など、その次には云はば若衆早見表とでも云ふべきものが貼られてあつた、それには土地の役者の品定めから陰間かげまのことを、この者ならかう云ふ宿へ掛けるやう、その藝からその容子なども書かれたものであつた。恐らく、この表に出てる若衆のものが、かう云ふ折の物好きな客のためを考へてその便宜をはかつたものであつたらう。その表にはこんな風に書かれてあつた。

- 一、花山藤之助 年齢十四歳 色白く緻縹よく、嘉太夫節を語ります。
- 一、岩瀧猪三郎 十六歳 踊上手、投節を唄ひます、物腰そのまま女のやうにももの柔かに生れついたものです。
- 一、夢川大六 十五歳 酒強く、幾人さまの御相手もいたします、文作の三味線上手

で、旅役者の中では衣裳見事の方であります。

- 一、松風琴之丞 十七歳 影繪の名手で、この外に口より水をだして壁に字を書く曲藝あり、手品も鹽長次郎まさりの腕がございます。

一、深草勘九郎 十七歳 物の云ひかた昔の鈴木平八生うつしであります、何の藝も持ちませんが、

一、雪山松之助 十九歳 野郎であります。その座についた容子は本當の役者と取違へるほどであります。

と、以上のやうな具合であつた。

「なるほど、これは氣のきいた書付だが、どれを呼んでも同じ値だと云ふなら、こりや紫帽子を取るはうが取り徳てもんぢやないか——」

と、云ふ幫間があると、横合から、

「へえ、知つたやうな口をきくんだね、野郎が自分から十九と書き出しておくからには、ほん

とうの年は三十九か四十だらうぜ、お前はたつた二十一の太鼓持、……さうさな、まあ親仁と一しよに蚊張に寝たやうな心持がして、ええわさ」

「そりやさうだよ、縁の遠い娘が年をかくすとしたつて、二つか三つ、多くてせいぜい五つと云ふところだらう、それでも娘が二十すぎではじめて嫁入りの振小袖を着たとすると、やつぱり恥しく、世間の噂も氣に病んで自分の町をはなれるまでは足早やに消えゆく、そんなやさしさがあるものだが、どうして野太い野郎のことだ、その年をかくすとなれば、まあ少く見て十と云ふところだらうね」

「ちがひないね、なにしろ此奴等は京から大阪、大阪から江戸と年柄年中旅から旅を歩いてゐるものばかりだ、この土地の者には、その生年月日なんか判らうはずはなし、どれだけかくしてゐるのやら知れたものぢやないさ」

それぞれ口善悪もない勝手な批評をするのであつた。とにかく、鼻の高い若衆を選んで呼ぶとしよう、これなら天狗頼母子講ぢやないが、どれを突き當てたつて互ひに恨みつこなしでよからう、と云ふので、さつそく、十一人呼び寄せて並べて見た。いづれも大した者ではなかつたが、それでもかうして並べて見れば一時の楽しみぐらゐにはなつた。それでその値は、野に咲く菜種みたいにあつさりと、この花まとめて全部で二兩三分がとこと云ふべらぼうな安直さであつた。

「さう、去年の秋でございましたか、大盡のお供をして、奈良の木辻町の女郎を買ひに行きました時、女郎残らず十六人總揚げして小判四兩でしたかな、あれにも驚きましたが、今日はまたその上の特別……」

「何さ、兎角安物買ひの錢うしなひつてな、まあこれもこれでよからうが、いい加減でさつさと引き揚げちまはふぢやないか」

大盡も面白くなさそうであつた。十一人の若衆が立ち並んで踊りを踊つてゐる最中を見はからつて、一座の連中はさつと退きあげ、それからは新町へ流れこんで行つた。

新町の廓の東門に來ると、そこで太鼓持の一人を仕立てて大袈裟な觸れこみをやらせたの

だ。

「さあさあ聞いたり、今の世切つての金持ちの御大盡の御光來だ、御氣に召した女郎があつたら、勤めが十年あらうと、親許へかへるまではお買ひ下さるとの仰せだ」

その後から九人の太鼓持ちに前後を圍ませ、貫録つくつて大盡は乗りこんで來た。その先には相かたから定紋のはいつた二つの提灯が立てられ、揚屋からは人橋を築いて盛り砂もしかねないほどの騒ぎとなつた。

九人の太鼓持ち共は、それぞれ九軒の井筒屋へ口上して廻つた。

さて、揚屋についてからがまた一口上、――

「そもそも、このおかたは、阿波の鳴渡に身を捨て船と申される大盡ぢや、お國許では銀などは屋根の瓦も同然と云ふ大層な御身代でおいでなのだが、これまではついぞ一度も揚屋などで御散財なされたことがござらんだと仰せられる、そんなお方にこんな世間の様子をお見せしないのも残念と云ふので、これよりは年に三度づつ、御散財が目的にお上りなさるのだと仰せ

られるから、そのつもりでおもてなしするがよろしい、何せかうしたお大盡さまだから萬事がおほやうでおいでになれる、きつと末々の者までも喜ばせていただけのぢや」

と云ふ次第で、先づ女郎には長徳寺の座敷の借賃に同じ一步金二百枚、揚屋の女房には金子十兩、庭掃きの下男下女に至るまでそれぞれ小判の花をふるまひ、そしてこれが今の世切つての大盡ぶりだと云はぬばかりの仰々しい態度、得意満面の體を見せたのであつた。

しかし、その散財はあまり効果はないやうであつた。どころか却つてその蔭では悪垂れ口をきく者すらあつたのだ。

「何だつて云ふのさ、大阪の近邊には天狗の住むやうな山がないからつて、我一人あんなに鼻を高くしてさ、可笑しくつて……」

誰も彼も、金をもらつてゐながら、この大盡を誹り、誰一人、ちつとも彼の奢りぶりに驚きの色を見せる者がなかつた。

その上、彼にあてこするやうに、――

「ちよつとばかりのことで、厭やになつて了ふね、女郎町といふ所はね、もともと金を使ふ所に慥へてあるのだから、小判なんて少しも珍しくはないんですのにね、……この前、松本と云はつしやる大盡が、太夫の玉の井にまだそれほどのお馴染みもないうちに、三月三日の桃の節句のお祝儀だと仰言つて、大さうな御様子をなさるやうなこともなく、金子百兩さらりとお送りになられたのを、誰も彼も見てるぢやなかつたかねえ、なるほど、この節は世間も景氣が悪くてお金の顔をあまり見られないから、まあ自然に、一兩の小判をいただいても二度か三度は頭も下げますけどねえ、それをああ仰々しくされちや、云ひたくないことも云ふことになり
ますわ」

客あしらの女中連中まで、互ひに言ひ合つて、この大盡のことを嘲笑してゐた。

なるほど、女郎買ひの究極の點に行けば、金の力に極るには違ひなかつたが、かう効果の相違のあるのは、また一にかかつてその金の費ひ様、つまり仕懸け方によるのである。さう大して散財もしないくせに面白がられる者もあるのに、かうして悪評をまねくと云ふのは、要する

にこの大盡の金の捌き方が下手であつたからだ。かう云ふのは、大勢の大鼓持ちに付き添はれてはゐるけれども、末頼しからざる大盡なのだ。

案の上、この大盡は三年とたつたかたため中に、國許の首尾を損ねて了ひ、たうとう一文なし裸一貫になつたのであつた。

そしてその後また彼は大阪に上つて來た。ちよつと、長堀の北側の裏長屋に、これも借錢の海にささを舟をあやつつてゐるやうな暮しをしてゐる彼と同郷の者がゐた、身過ぎにところ天を乾して細々と食ひつないでゐたのだ。彼はやうやくここに轉げこんで、人の迷惑も顧みず、でなくとも苦しくて堪らぬ米櫃を喰ひ潰しては、無益な腹をふくらませてゐた。

しかも、この裏長屋の裏のはうは、吉原の揚屋町になつてゐたのだ。

とは云つても鹿子位女郎ばかりの寄り所で、それ以上のいい女郎はゐなかつた。それだけに馬鹿騒がしく、弾き唄ひの投節などを、朝早くから夜の更けるまで、三味を弾く手と唄聲のつづく限り、これ一日十七夕の稼ぎどころと云はんばかりに喚き立て、弾き鳴らすのであつた。

この今は零落した大盡も、その昔はこんな鹿子位女郎なぞにちよつと色眼を使はれたりして不愉快に思つたものであつたが、今は何と變つたことか。目の前で、揚屋の裏二階の簾を巻きあげさせ、明け放しの座敷にうたたねを装ひながら女郎に髭を抜かせて楽しさうにしてゐる男を見たりすると、とてもとても羨しく思はれてならなかつた。自分なんかは、全盛の時は七夕の日なぞに一晩六十兩、ばらりと散財したものであつた、あの裏二階の客なんかは高が二十匁にも足らぬ奢りなのだらうが、それだつて傾城狂ひの楽しさには別にちがひはない譯だ、なぞと思はれてならなかつた。

(全く、今になつて思へば、鹿子位女郎を買つて我慢してゐたら、どんなにしたつて三代は續いた身代であつたものを、太夫に惚れてかかつたばかりに、……)と、自分でもあつと思ふほど身代潰しに扱つかの行つたことに氣がついたつて、もう遅く、どうにもならぬ後悔であつた。

物哀しさうに、明け暮となく、汚い自分の家の窓をあけては、揚屋の裏二階などを眺めて幽

かに心を慰めてゐるが、いつか次第次第に、渡世のはうがうまく行かなくなり、喰ふためには止むを得ず、夜なべ仕事に蜘蛛舞人形をこしらへて賣り歩き、その蜘蛛の糸にも似たほそぼそしい生活を辛うじてつづけるのであつた。

かうその日の生活に追ひつめられるやうになつては、人の心もあさましくなるものであつた。あれほど執念であつた色里の三味線小唄の音も、今ではもう耳にやかましく、鬱陶しく聞えるやうになり、高塀一つ越せばそこはもう色里であることすら、氣にも思ふことさへなくなつて、ただ、何とかして今年こそは雑煮を喰べて年を越したいものだとそのことばかり思つて暮す、さもしくも不自由きはまらないその日その日であつた。

かうして暮すこと、三年あまりで、十二月の九日、哀れこの男は三十七を一期にこの世を去つたのである。それは帷子も着せられないみじめな死出の旅姿であつた、繩からげの棺に入れられ、道頓堀の野邊に送られ、どこの亡者か知らぬがそれが焼かれた残り火の中にほうりこまれて、やうやう煙にされたのであつた。

だが、いま、この男を葬つた竹林寺に行つて見れば、山譽風雪と法名を刻みつけた銀二枚ばかりで出来さうな石塔が一基たてられてある、この石塔の旋主は越後町まんと記してあつた。どんな女郎がこれを立てたのか知らないが、その志のほどはやさしいものである、尤も、この奇篤な志の埋め合せに物好きな客から、女郎はきつと思ひがけない金を貰ふことだらうけれども……。

二、眼に見ぬ戀

なにごとともさうだらうが、本手の小唄にしても、極端に凝りすぎたものになると、素人にも理解できなくなり、したがつてまた、それを珍重がらなくなるものだ。

いつの事であつたか、江戸の番町に、さる身分のある御方で、隠し藝に八筋懸の三味に忍駒をかけて弾かれたことがあつた。比類ない立派な音曲であつたので、これをこのまま隠し藝と

して埋らすことを残念に思ひ、役者の九兵衛といふ者が、御方についてその教授をうけたのであつたが、その音曲はとても難しいものであつたため、後に傳へることもできなく、間もなくそんなものがあつたと云ふことさへ世間から忘れられて了つたのであつた。

花橋の袖の香も何とやら、去る者は日々に疎しの譬のやうに、昨日の流行も今日に變るものである。そのやうに儂ない浮世を、さう浮世なればこそ太く短く樂まうと思ふ人も出て來るのである。無分別と云へば、まさしく無分別に違ひないが、どうせ短い浮世のことだ、うまいこと極樂淨土に行けて、精進齋を食ひながら物堅く佛付合をしたつてどうならうと云ふものが、それよりは筋鯉の刺身に夜を明かし、洒落れた落し話に面白可笑しく暮すのもいいことではないだらうか、とさうもこの浮世は考へられるのだ。

さて、ここに落し咄を稼業に、大盡がたの御機嫌をとつてゐた城俊と云ふ座頭があつた。――眼は見えなかつたが、目明きのかなはぬほど色里の噂話や男女の機微などを心得た男であつた。

或る大盡が、この座頭を一座に呼んで楽しんでゐた時、ふと、――

「ところで城俊、お前は色里のことには不思議なほど明るいやうだが、この頃、儂の可愛いがつゝる太夫が、大部久しい間、休んでゐるのだ、どう云ふわけなのか、お前は知つてゐるかな」

と、聞くのであつた。

「ええ存じておりますとも、太夫さまのお腹に若様が一人入つておられますんで」

「ほう、それは偉いことを知つてるんだね、誰がそんなことをお前に知らせたのだ、弓矢八幡に誓つて間違ひはないことか、いや、八幡と云へば深川の八幡、その子は深川の助六の子でもあるかな？」

「いやそりやどうも、……それはもう生れぬ先の襁褓定めみたやうなものでしてな、それまでは判りませんけれども、生れた子供が娘御なら、十呂盤も持つて生れていらつしやるし、もし坊ちやまでしたら、反古綴じの帳面をぶら下げてお生れになられますよ」

「ほほう、して見ると、子の親仁は町方まちかたの大盡かな？」

「いやいや、それほどの男でもござんせんよ、たかの知れた兩替屋の小さなところでございませよ、と云へば、どうやらあなた様だつてその相掣あひらでおいでになるんだから、まんざらかかりもないつてこともないぢやござんせんか」

やんわりと頓智上手に煽てあげたのだ、一座は面白さうにどつと來たのであつた。

「一つ大盡、この座頭のために奉加についておやりなつてはどうです？」

座中の者がすすめると、大盡も機嫌がひどくよかつたのだらう。

「さうだな、そんならこの坊主こうたうに勾當こうたうの位をとらせてやらう」

と、大部なはづみ方であつた。――勾當とは檢校につぐ座頭の位で、僧位ならば法橋法眼に相當する高い位であつた。序手に云へば、京都に座頭の總檢校が置かれてあつた。

この大盡の後援に、城俊は夢かとばかり喜んだのであつた。

そして善はいそげと、江戸を發ち、宇津の山越え遙々と、京の都の人に逢ふのも楽しみに旅

をつづけて来たのであつた。

道中つつがなく、今日はすでに逢坂の宿場についた、ここに、昔はなにがしと云はれた法師の遺跡である、その宮も附近の藁屋も昔にかはつて朽ち果ててゐた。同じ盲法師の辛さを、自分の身にひきくらべて偲びながら、城俊はその見えぬ眼に涙を浮べるのであつた、それがまた自然な手向ともなつたのであらう。その法師が搔き鳴らした琵琶の音も未だにきこえるかと思はれるやうな氣持で、いつか琵琶湖のほとりも過ぎ、やうやく、まだ日の高いうちに京都の土を踏んだのであつた。

その日は、三條のなにがしと云ふ宿屋に草鞋を解き、勾當の位を許される大願成就の日を待つことになつた。

さうした日を送り迎へしてゐた時、都の大盡が吉野太夫に逢つたその一興にまかせて、この座頭も呼びよせ、

「どうだ、お前にも島原を見せてやらうか」

と勧めたのだ。

城俊もその人の云ふなりになつて、どちらが東やら北やらむろん彼には方向も判らなかつたが、ただ連れられるままに盲滅法に歩いて行つた。その昔、誰やらが、(西島の細道名残惜しきは)と歌つた朱雀の野邊、島原に入つたのだ。

(なるほど、聞きしにまさる島原だな、この太夫が上林かんばやしの薫さまか、……ああ、お茶か、お茶は初むかしだな、なるほど、結構なところだよ、嗚呼ほんとにこの眼をあけて眺めたいものだ——)

と、城俊は嬉しがつた。

それからは彼は彼は大盡に連れられて、丸屋の七左衛門の座敷にあがつた。いろいろと面白い遊興であつた。江戸とちがつて、厭應なしの甘たるい情緒、女のもの優しい戯れぶりに、つひ我知らず城俊も深酒に亂れ、しまひには、飲むのも辛らさうに見えて来た。それを見たはんじやうと云ふ女郎が氣の毒に思つて、城俊の替りその酒をのんで助けてくれた。

城俊は、この女郎の情は嬉しかった、——その場ですぐ、彼はこの女郎に惚れこんで了つた。よくよく惚れこんだものと見え、彼はその座の蠣の吸物も喉を通らぬ仕末、夜が明けて歸つてまた出直して来るのさへ待ちきれなくなつて、たうとう人を頼んでこの女郎に口説きかけ、やうやうの思ひでこの不思議な戀を成りとげたのであつた。

これが病みつきとなつて、城俊は忍び忍びにはんじやうの許に通ひつづけたのであつたが、いつしか江戸の大盡の後援でいただいて來た小判は包紙も残らぬまでに綺麗に散財して了つたのである。さうなつては、もう勾當の官位を得る望みもなくなり、と云つて今更おめおめと東へ歸ることも叶はなくなり、自分からすつかり身の置き所もないほど、世の中をせばめて了つたのだが、城俊は一向にそれが口惜しいことにも思はれなかつた。

ただ、かう金がなくなり、女郎に逢へないことだけが、今の彼の辛い思ひであつた。

もう今となつては、東へも歸れず、女にも逢へず、世に生きる望みも絶えたと思ひつめ、いつそ佛の國に落ちようと決心して、宿を出た。夕暮時、伏見の里あたりを彷徨しまはつた場

句、六の衢ちまたの地藏前を通り、豊後橋から入水せんとその橋を半ば渡つたのであつた。その橋に佇み、はんぢやうの形見の扇を手になぶりながら、彼は吹く夕風に今更のやうな無常感をそそられるのであつた。

(はんぢやうの情だけはいついても忘れまい、流れる水にもし情あるなら、今投身する我が身體を、渦の中深く捲きこんで、二度と人眼に我が姿をさらすことのないやうにしてくれ：

：)

と、心に念じつつ、彼は足を揃へて飛び込まうとした、その瞬間、その橋を渡りかかつた笹屋の某と云ふ男、城俊とは顔見知りの仲であつたばかりに引きとめたのであつた。

橋のたもとの佗しい藁屋に、彼を連れて行き、いろいろ法師の悲しい次第を聞きとつた笹屋の某も、すつかり彼に同情して、男泣きに涙を淨べ、——

「そのお氣持は無理もない、けれども死んで先はどうなりませうか、生きてゐる中こそ戀もあらうぢやありませんか、ここは暫く京都に身をかくし、世間の人の機嫌をとつて勤めてゐれ

ば、いつかはまた官位の望みも、戀の望みも、二つながら叶ふ機會もないとは云へますまい」
 いかにも尤もらしい意見であつた。城俊もその言葉に従つて、京都に身をかくし、暫くは彼の秘密な悪評も立たずに済んでゐた。

だが、かうした秘密はいつか漏れるものだ、誰が噂を撒いたともなく知れ渡つた。雁金屋利右衛門などと云ふ奴は、おせつかいにも、このことをはんぢやうに知らせたりしたものであつた。

これを聞かされた女は、彼は常の人と變つた盲法師、それがそのやうに零落したのを氣の毒にも悲しくも思つて、自分の衣裳や諸道具などの目ぼしいものを賣つて金に代へ、こつそり人頼みして、城俊のもとへこれで勾當の位をいただくやうと云つて寄越したのであつた。

だが、喜ぶと思ひの外、彼は、――

「飛んでもない、筋道の立たぬお金はいただくことは出来ません」

とばかりに、急に京都にも住みにくく思つたであらう、淀川を舟で下つて、大阪に逃げて了つ

た。

その後、大阪北濱に居を定め、杖さへ持てないやうな貧乏な座頭の坊となつた。秋といふのに、身に薄衣をまとひ、露霜にぬれながらも、藝は身を助くるとか、三味の糸に戀の唄をのせ、僅かな喜捨に命をつないでゐた。その哀れさに、盲神の導きがあつたであらうか、今では彼もよこしまな心も起さず、ふつつりと色戀のことも思ひ諦めて、靜かな生涯を送つてゐたと云ふ。

三、都も淋し朝腹の献立

身に相應の遊びであつたら、天も決して咎めるものではないが、そのほどほどを辨へることは容易なものではない。

昔から随分多くの大盡があつたと聞きもし、また見ても來たが、その中の一人、宇甚と云は

れた大盡は、生涯一度も洗つた肌着を身につけたことがないと云はれてゐた程の金持ちであつた。しかし、それほどの大盡もやはりその末は哀れなものとなつて、洗ひざらしの肌着どころか、破れた紙子かみこを着てゐても風邪もひかなくなつたと云ふ惨めな境遇に終つた。また、紙帳しちやうと云ふ大盡は、全盛時分は實に徹底した現實主義の人で、後生願ひなぞ大嫌ひなほうであつたが、それも色戀に身を滅してからは何かに縋りつきたい氣にもなつたのであらう、己が夫婦ばかりではなく妾共までも剃髪させて、佛門に歸依したと云ふことであつた。

京都には花崎と云ふ大盡があつた、この人は散々遊んだ揚句聚樂のあたりに引込んだのであつたが、自分は坊主の社會だつてやはりうるさくて嫌ひだと云つて、そんな眞似はしなかつた。それは、女郎狂ひに飽いたからではなく、結局は利巧なに立ちまはつて、色戀のやめどきを辨へてゐたからである。

實際、この色里のことだけは、飽きるまでと云ひだしたら、どこまで行けば際限やらその限りなぞありはしないのだ。例へば、遇書町なの中と云ふ大盡にしてからがさうだ。これも散々放

蕩の末、まだ男盛りで隠居の身となつた、そして、こんな楽しみもあるのに何で今までそれに氣づかなかつたらう、と揚弓の鏝なごまに一年の暮しを三貫目に切りつめた生活をしながら、遅いその發明を悔いてゐた。全く、こんな生活の中では昔の思出なんかしたつて何の面白味もなし、それもあの大屋敷を賣らぬ中ならば、まだしも智慧があつたと云はれやうが、今ぢやもう遅そ過ぎることであつた。

次郎と云ふ大盡は、不思議に長町の下屋敷は残つてゐた。残つてゐたのはまあそれに越したことはないにしても、その下屋敷の彼の生活ぶりは好ましいものではなかつた。この大盡は尺八がうまかつた。そこで、角田忠兵衛だの、髭の半右衛門だのと云ふ同好の友を呼んで、よく連吹きなぞをし、浮世の荒風は何處を吹くと云はんばかりの風であつたが、あたり近所はその騒騒しさにえらい迷惑であつた。同じ尺八の遊びでも、艶めかしい野郎でも招いて、女のやうな差し櫛をささせ、緋縮緬の腰のものをさせて、色付の柱にもたれ、思ふ人に顔をそむけながら少し癩走つた聲で、(吉野の山)でも歌ふのに連れて尺八の伴奏をするなら、色氣もあり趣き

もあつて、聞き映えもするのだ。

また塚口と云ふ大盡が天王寺に身を隠したのだつて、お釋迦さまみたいに子孫を嫌つたからではなかつたのだ。かうして列記すれば、その身の振り方はいろいろさまさま、人の心のやうにそれぞれ違つてゐるが、と云つても、世を遁れたからとて、その心根はさう格別變化してゐるものでもない。役者の藤十郎は自分の懐具合には頓着なく、銀十枚出して大津の大鳥を取り寄せ、いつもの酒の吸物にしたと云ふし、また米貸しの相模屋の大盡は西の久保に身を隠してゐながら、恵心僧都作の佛像を賣つて、その金ですぐ太夫の千歳を買つたと云ふ、いづれも殊勝な心ばえと云へば、云へるのではないか。また吉彌と云ふ振袖若衆が、野田へ藤見にでかけたの歸り道、福島のに隠居してゐる人を訪ねて見たら、佗び住居とてお前に土産にやるほどのものもないから、これで自分の欲しいものを買ふがよいと、小判五百兩を土産にくれたと云ふ。何と云つても、贅澤な調度類などに事かかぬやうであつたら、衣食よりは家を持つてゐることに越す貴さはないのだ。たとへ世を遁がれた身だからと云つて、雨露を凌ぐための家がな

くては不自由である。

ところが、都に備利國と云ふ人がゐて、この人は何としたことか、自分の家も宿も定めず飄飄乎として暮してゐたのだ。初めは、彼はその當時の京都のお歴々と交友があつたから、東山智恩院の門前町に假寓してゐたのだ。谷峰の見晴らしのよい所を借りて、至極暢氣な自炊生活をしてゐたが、その自炊生活のわづらはしさも厭になつてきた。そこで或る日、

「かう云ふ生活も煩しくなつたから、一つこれからは皆さんが順番になつて、一日銀二匁一分づつ寄附して下さらんか、これが私の今一番の望みだ」

と、その交友達に云ひだした。

どう云ふ譯か、と聞かされて、彼は、その金で祇園町の仕出辨當へあつらへを頼むのだ、それがしの辨當は一匁三分、下男のが八分と云ふ値段、かうすれば朝夕椀を洗ふ手數も省けて、はかもゆくことだ、と云ふ次第であつたのだ。

望みとあれば、それもよからうと云ふので、今ではその草庵には小さな釜が一つ置いてある

ばかり、それに素湯を沸して、客があればそれに香煎を入れて出すのであつた。

或る時、森五郎、鏝三郎と云ふ連中が、早咲きの花を眺めに東山にのぼつた。その前夜は、この連中は大和橋近くの馴染の茶屋に遊び、その頃京都で評判の菱屋の吉太郎に瓜二つほどよく似たと云ふ女を呼び寄せ、三味を弾かせ、唄をうたはせて遊んでみたが、やつぱり質は質で、とても島原の太夫には似てもつかなかつた。味氣ない思ひがしてきて、早朝女とは起き別れして、手水をつかひ、齒を磨いてゐながら、ふと、備利國のことを思ひ出して訪ねて來たのであつた。

庵主も、これはようこそと、朝戸をあけて迎へた。大阪、京都の噂話など取りまぜて語り合ひ、四方山話に一ときの興を移してゐるうちに、ほどなく朝日の影もさしてきた。

庵主はそれに氣づいて、――

「さうぞ、ここで朝飯を召しておいでなさいよ」

客たちは、それはと辭退するのであつたが、主がなほ是非にとすすめるので、――

「それでは、酒麩でなり一つあつさりいただきませう」

と云ふのであつた。主は硯すずりを取り出しながら、

「さう仰言らずに、大阪のはうではいけなかつたさうですから、せめて京都ではうまいものと召上つていらつしやい、さあさあ何なりとお望み次第のものを、……とり敢へず、それでは私が亭主役に先に云ひませうかな、嫁菜に雲雀のお汁がいいでせうか、それから焼物は勢田鰻の上ものをお喰べになつて下さい、それから子持ち鮎の煮びたしと、……いやこれでは川魚づくめになりますか、それでは次は鯛の皮引きを三杯酢にしてか、さうさう、それから掘川牛蒡の太煮、まあこんなところでよろしいですか、引肴には、どんなのを見つくるひませうか」

それぞれ書きつけ、客の頭數をよんで、――

「おいおい、これを六人前な、出来るだけ早く届けるやうにと、いつもの茶屋へいつて來い」と、下男に渡すのであつた。けれども、その下男は受け取らうともせず、聞えぬふりして、左手で火箸をいぢりながら灰の上に輪なぞ書いてばかりゐて取り合はぬのであつた。

「どうしたのでせう、さてはこの下男は聾ですか」と、客が訝しげな顔つきをした。

「いえ、聾でもなんでもござせん、ちやんと聞いてはりますが、普段の勘定がたまつてるものですから、毎日の二人の膳でさへ、前々の拂ひを持つて來なければと云はれるほどでござすよ、それをこんな振舞料理を六人分とたのんで見たところで、判り切つたこと、行くほどのこともあんまいと存じましてな」

と、自分の主人の顔を睨みつけての放言であつたのだ。

この首尾は氣の利いた連中のこととてただ大笑ひに紛らしてすまして了つて、その後、それでは私どもの宿のはうへ案内しよう、と誘ふことになつた。かうして、取り敢へずと云つた朝飯もたうとう四つ過ぎになつたのであつた。

この法師は、元來からなかなかの美食好みであつたから、朝飯のときとなつても、酢がどうの、鹽加減がどうのと、うるさい講釋まぢりに舌鼓をうつて、――

「大阪で喰つた鱈さばらにくらべると、こいつは新しい、蒸しても焼いてもまるで味が違ひますな」と、全盛時代のことを忘れず、そんなことを云つたが、そぞろ昔を偲んで、何か夢のやうな氣持にもなるのであつた。

「昔は昔、やはり今はかうした萬事を捨てた捨坊子の境遇が一番よいですよ」と哄笑するのであつた。

この男もその昔は、藤屋の太夫職に馴染となつたこともある大盡であつたのだ。一時大阪で名高かつた朝妻に書かせた九枚つづきの誓紙も、いまでは恐らく火うち箱のほくちほくちにでもなつてゐることだらう。

草庵にゐる時は、いつも自墮落じだらく寝ばかりしてゐて、人が起してもなかなか眼を覺まさぬ男であつた。朝寝が過ぎて、晝顔の盛りになる時刻でなくて起きて來ないことも度々だつた。それでも、この男がここで死んだ時は、ちやんと白帷子を着せてあつたと云ふ京の噂である。

西鶴置土産 終



印 檢

昭和十三年六月十二日印刷
昭和十三年六月十五日發行

現代語譯國文學全集第二十一卷

西鶴名作集 下

定價壹圓八拾錢

著作者 武田麟太郎

發行者 加藤雄策
東京市小石川區表町一〇九

印刷者 君島潔
東京市小石川區久堅町一〇八

發兌 東京市小石川區表町一〇九
凡閣
振替東京三六三三九
電話小石川六六一〇

共同印刷株式會社印刷

第二十回配本

現代語譯文全集

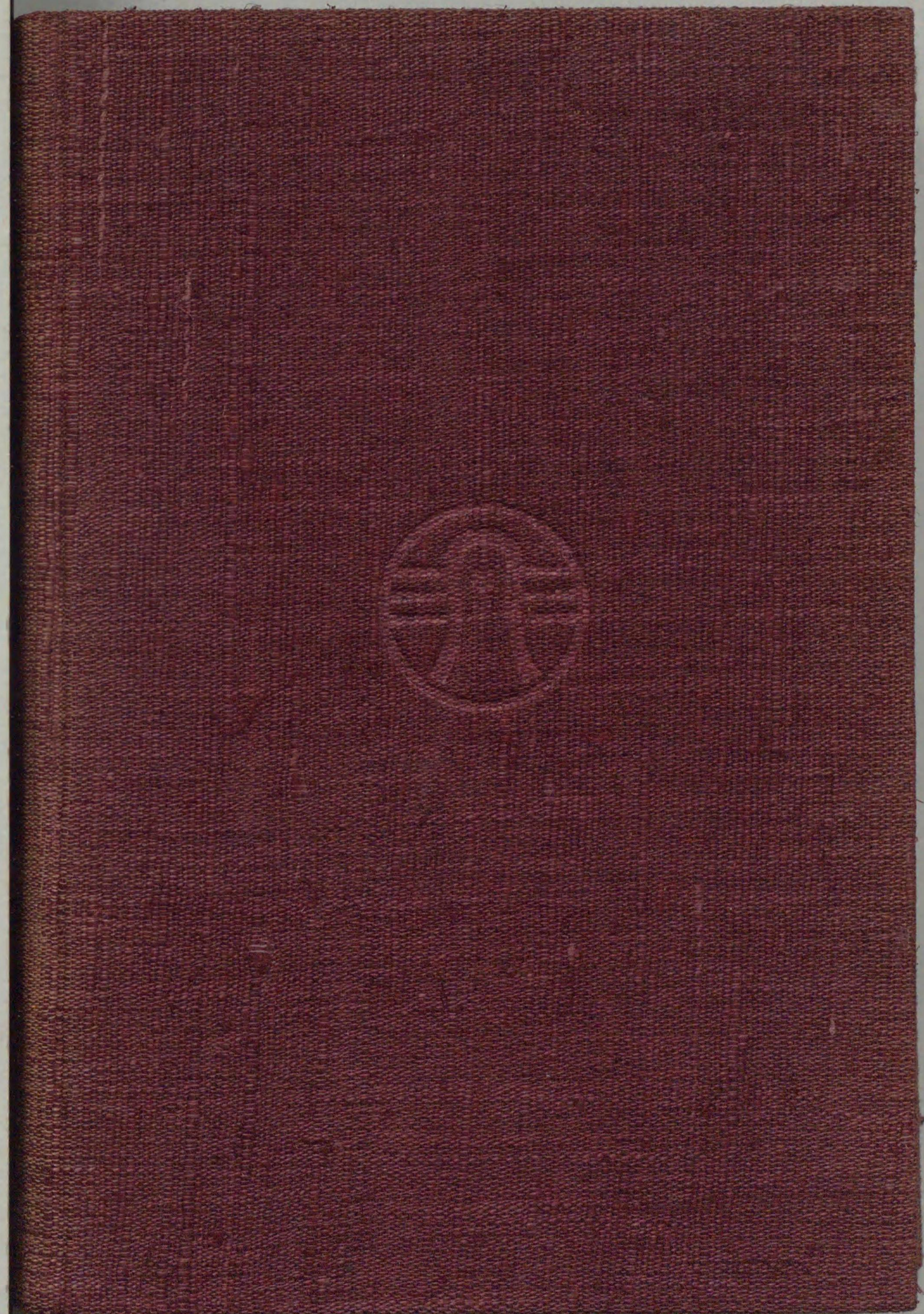
全二十六卷 定價壹圓八拾錢

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
保元物語・平治物語 前田 晁	今昔物語 山岸 德平	榮華物語 藤村 作	大鏡 五十嵐 力	平安朝女流日記 與謝野 晶子	土佐日記外二篇 藤村 作	枕草子 玉井 幸助	源氏物語下窪 田 空穂	源氏物語中 與謝野 晶子	源氏物語上窪 田 空穂	竹取物語他二篇 川端 康成	伊勢物語・落窪物語 窪田 空穂	古事記・日本書紀抄 植木直一郎
26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
讀本傑作選 永井 荷風	八犬傳 白井 喬二	雨月物語・春雨物語 漆山 又四郎	近松名作集下 河竹 繁俊	近松名作集上 河竹 繁俊	西鶴名作集下 武田 麟太郎	西鶴名作集上 石割 松太郎	徒然草・方丈記 佐藤 春夫	義經記・曾我物語 漆山 又四郎	增鏡岡 一 男	太平記 西村 眞次	源平盛衰記 白井 喬二	平家物語 菊池 寛

現代語譯國文學全集

全二十六卷 定價八元

1	古語	現代語	譯文
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26



現代
語譯
國文學全集月報

第十二號

小石川表町
非凡開

編輯部より

1

武田麟太郎氏の「西鶴名作集下」をお送りいたします。特に御諒解を得たく存じますのは、時局的見地から良風美俗上現代においては如何かと思はれる箇所を、可成りところどころに伏字としなければならなかつた事であります。原典のまゝならばそれでよいのですが、現代語譯となると、原典の文學的特性と言語感覚の上に變動が生じるわけですから、原典の意圖する文學的意義が誤つて讀者に傳へられる傾向があるのです。事實のみが強く目立つて來て、その秀れた文學精神が見られなくなる傾きがあるのです。伏字としたのは、右の見解から出發したのであります。それも當局の方々の、懇切にして熱意ある御注意をいただき、それに據らせていたゞいたものであることを、特に各位にお斷りして置き度いと存じます。でありますから、西鶴の眞精神に觸れようとされる方は、少くとも岩波文庫版を併せてお讀みになる事をおすゝめ致します。「五人女」「一代女」の價値はすでに常識となり了つたかの觀がありますが、「置土産」の方はそれほどではありませんでした。然しこの「置土産」は、彼の傑作とも言ふべく、人生の味ひに徹

したといふ態度の上では、むしろ前者を凌ぐものではないでせうか。人間愛慾の赴くところ、苦しみつゝも如何ともなし難く、あるひは又、その苦しみに住して味ひ徹するといふ境地、それらをじつと見つめてゐるのがこの作品の秀作たる所以ではないでせうか。たくまざる客観精神、必然的に到り得たこの精神を尊いものに思ひます。

次回は愈々待望の文豪永井荷風氏の「梅曆」であります。最初の豫告には「讀本傑作集」とありましたが、著者の良心的選擇によつて、この江戸人情本の最高名作と決したのであります。只今印刷中でありませんが、その譯の如何に秀れてゐるかは私共が多くを語る必要はないと考へます。
御期待願ひます。(六月十二日)

次回配本決定

七月中旬發賣

第二十六卷

梅

こ

よ

み

永井荷風

譯